

# 履修の手引 講義概要

2017年度  
(平成29年度)

日本語教員養成課程

北海学園大学

HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

## 北海学園大学日本語教員養成課程について

本学における日本語教員養成プログラムは、日本語非母語話者に対する日本語教員を育成する目的で平成10年から行われ、平成12年からは人文学部を窓口とする事務局や委員会体制を整備し正式な「課程」として発足しました。本課程のカリキュラムは、当初、昭和60年（1985年）の文部省調査委員会報告による「日本語教員養成の標準的教育内容」を指針として策定されました。しかし、国内外の日本語学習者の増加と多様化など日本語教育を取り巻く状況が大きく変化したことを受け、文化庁日本語教員養成に関する調査会が新たな枠組みの広範囲にわたる教育内容を提示してきました（下の表を参照）。そこで、本学の課程においても文化庁による新教育内容の意義を認め、平成17年（2005年）の人文学部カリキュラム変更に関連させ、課程カリキュラムは大幅な改定に至りました。さらに、平成26年（2014年）からの新カリキュラム始動に伴い、本課程においても科目の新設、名称変更などがあります。また、平成29年度から科目設定が5つの区分（下の表を参照）に沿った形で配分され、各区分の履修要件が若干変更しています。年度別の開講科目、履修単位数等詳しい内容は3～13頁を確認してください。

日本語教員の免許、資格は公的な制度として確立されているものではなく、資格の認定は日本語教員養成課程をもつそれぞれの教育機関に委ねられています。本大学の場合は、申請に基づき、大学卒業を前提として、課程の修了者に「日本語教員養成課程修了証」を授与しています。なお、日本語教育機関によっては教師資格として課程修了以外の要件も求められる場合がありますので、詳しくは課程担当教員に相談してください。

### 文化庁の教員養成に関する調査会答申「日本語教員養成において必要とされる教育内容」

（平成12年3月30日公開された内容）

領域	区分	内容	
コミュニケーション 教育に関わる領域 言語に関わる領域	①社会・文化・地域	世界と日本	歴史/文化/文明/社会/教育/哲学/国際関係/日本事情/日本文学……
		異文化接触	国際協力/文化交流/留学生政策/移民・難民政策/研修生受入政策/外国人児童生徒/帰国児童生徒/地域協力/精神衛生……
		日本語教育の歴史と現状	日本語教育史/言語政策/教員養成/学習者の多様化/教育哲学/学習者の推移/日本語試験/各国語試験/世界各地の日本語教育事情/日本各地域の日本語教育事情……
	②言語と社会	言語と社会の関係	ことばと文化/社会言語学/社会文化能力/言語接触/言語管理/言語政策/言語社会学/教育哲学/教育社会学/教育制度……
		言語使用と社会	言語変種/ジェンダー差・世代差/地域言語/待遇・ボライトネス/言語・非言語行動/コミュニケーション・ストラテジー/地域生活関連情報……
		異文化コミュニケーションと社会	異文化受容・適応/言語・文化相対主義/自文化(自民族)中心主義/アイデンティティ/多文化主義/異文化間トランス/言語イデオロギー/言語選択……
	③言語と心理	言語理解の過程	言語理解/談話理解/予測・推測能力/記憶/視点/言語学習……
		言語習得・発達	幼児言語/習得過程(第一言語・第二言語)/中間言語/言語喪失/バイリンガリズム/学習過程/学習者タイプ/学習ストラテジー……
		異文化理解と心理	異文化間心理学/社会的スキル/集団主義/教育心理/日本語の学習・教育の情意的側面……
	④言語と教育	言語教育法・実習	実践的知識/実践的能力/自己点検能力/カリキュラム/コースデザイン/教室活動/教授法/評価法/学習者情報/教育実習/教育環境/地域別・年齢別日本語教育法/教育情報/ニーズ分析/誤用分析/教材分析・開発……
		異文化間教育・コミュニケーション教育	異文化間教育/多文化教育/国際・比較教育/国際理解教育/コミュニケーション教育/スピーチ・コミュニケーション/異文化コミュニケーション訓練/開発コミュニケーション/異文化マネジメント/異文化心理/教育心理/言語間対照/学習者の権利……
		言語教育と情報	教材開発/教材選択/教育工学/システム工学/統計処理/メディア・リテラシー/情報リテラシー/マルチメディア……
	⑤言語	言語の構造一般	一般言語学/世界の諸言語/言語の種類/音声の種類/形態(語彙)の種類/統語の種類/意味論の種類/語用論の種類/音声と文法……
		日本語の構造	日本語の系統/日本語の構造/音韻体系/形態・語彙体系/文法体系/意味体系/語用論的規範/表記/日本語史……
		言語研究	理論言語学/応用言語学/情報学/社会言語学/心理言語学/認知言語学/言語地理学/対照言語学/計量言語学/歴史言語学/コミュニケーション学……
コミュニケーション能力		受容・理解能力/表出能力/言語運用能力/談話構成能力/議論能力/社会文化能力/対人関係能力/異文化調整能力……	

# 北海学園大学日本語教員養成課程履修規程

(目的)

第1条 この規程は、北海学園大学（以下「本大学」という。）の学則第51条の2に基づき、日本語教員養成課程（以下「課程」という。）の授業科目、単位、履修方法に関する事項を定める。

(授業科目)

第2条 課程の授業科目、単位数及び年次配当並びに必修科目、選択科目の区別は、学則別表12(1)及び(2)のとおりとする。

(履修願)

第3条 課程の授業科目を履修しようとする者は、所定の期間内に、受講料等を納入し、「履修願」を提出して、その許可を受けなければならない。

(単位の修得)

第4条 単位を修得するためには、履修した授業科目の試験に合格しなければならない。

(試験)

第5条 試験は、原則として、その授業科目の授業が終了した学期末毎に行なう。

(成績の評価)

第6条 授業科目の成績評価は、秀、優、良、可及び不可とし、秀、優、良及び可を合格とする。ただし、この成績評価になじまない一部の科目は、合、否とする。

(修了要件)

第7条 本大学の学生が課程を修了するためには、卒業に必要な単位を修得し学士の学位を授与される者で、別表12の授業科目のうち、必修・選択科目を含み、32単位以上を修得しなければならない。

(修了証書の授与)

第8条 学長は、課程の授業科目を履修し、修了に必要な単位（32単位以上）を修得した者に、申請に基づいて本大学所定の修了証書を授与する。

(受講料等)

第9条 課程の授業科目を履修する者は、本大学学則別表14(9)に定める受講料等を納入しなければならない。

(科目等履修生)

第10条 本大学の科目等履修生規程に基づいて入学した者は、当該学部及び課程委員会の許可を得て、課程の授業科目を履修することができる。

2 科目等履修生が一年間に履修できる単位数は28単位以内とする。

3 科目等履修生で別表12(1)、(2)の授業科目のうち、必修・選択科目を含み、32単位以上修得した者には、本大学所定の修了証書を授与する。

附 則

1 この規程は、平成12年4月1日から施行する。

2 ただし、この規程は、平成10年度以降入学者（科目等履修生は除く。）から適用する。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成17年4月1日から施行する。

2 ただし、平成16年度以前入学生については従前の規定を適用する。

附 則

1 この規程は、平成24年4月1日から施行する。

2 ただし、平成23年度以前の入学者については従前の規則による。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

## 日本語教員養成課程修了要件

### 2017 年度以降入学者適用

社会・文化・地域	8 単位以上
言語と社会	2 単位以上
言語と心理	2 単位以上
言語と教育	10 単位以上
言語	10 単位以上
合計	32 単位以上

### 2016 年度以前入学者適用

言語領域（言語）	10 単位以上
言語領域（外国語）	2 単位以上
教育領域	12 単位以上
社会・文化・地域領域	8 単位以上
合計	32 単位以上



## 2017 年度以降入学者 適用

### 2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目  
 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分			
		1	2	3	4	計	経 済	地 域 経 済	経 営	法 律	政 治	日 本 文 化			英 米 文 化		
	社会・文化・地域																
	日 本 文 学 学	2				2	○	○	○	○	○	○	○		8 単位以上必修  英米文化学科の 学生は2年次開 講	一般教育科目	
	歴 史 学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			一般教育科目	
	歴 史 学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○			一般教育科目	
	歴 史 学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○			一般教育科目	
	歴 史 学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○			一般教育科目	
	国 際 事 情	2				2	×	×	○	○	○	○	○			一般教育科目	
	日 本 文 学 史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目	
	日 本 文 学 史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目	
	日 本 文 化 概 論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目	
	日 本 文 化 概 論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目	
	日 本 史 概 論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目	
	日 本 史 概 論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目	
	ヨ ー ロ ッ パ 文 化 概 論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目	
	キ リ ス ト 教 文 化 論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目	
	ア イ ス 文 化 論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目	
	ア イ ス 文 化 論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
	ア ジ ア 地 域 論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
	ア ジ ア 地 域 論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
	言語と社会																
	世 界 の 言 語 と 文 化	2				2	○	○	○	○	○	○	○	2 単位以上必修	一般教育科目		
	異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○		一般教育科目		
	アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○		一般教育科目		
	言語と心理																
	人 間 関 係 論	2				2	○	○	○	○	○	○	○	2 単位以上必修	一般教育科目		
	日 本 語 教 育 学 特 論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	言語と教育																
○	コ ン ピ ュ ー タ 科 学	2				2	×	×	×	○	○	○	○	必修8単位含み 10 単位以上必修	一般教育科目		
○	日 本 語 教 授 法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 教 授 法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 教 授 法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 教 授 法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 教 育 演 習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 教 育 特 別 演 習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	言語																
○	英 語 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン I	1				1	○	○	○	○	○	○	○	必修4単位含み 10 単位以上必修  人文学部の学生 のみを対象に開 講	一般教育科目		
○	英 語 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン II	1				1	○	○	○	○	○	○	○		一般教育科目		
○	言 語 学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○		一般教育科目		
○	言 語 学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○		一般教育科目		
○	Communication Skills I	2				2	×	×	×	×	○	○	○		人文学部専門科目		
○	Communication Skills II	2				2	×	×	×	×	○	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 学 概 論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 学 概 論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 学 特 論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 学 特 論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 学 特 論 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	日 本 語 発 声 実 習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	対 照 言 語 学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	英 語 学 概 論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	英 語 学 概 論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
○	英 語 学 特 論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目			
○	英 語 学 特 論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目			
	計	50	18	22	0	90											

# 開講科目一覧および年次配当

2016 年度入学者 適用

## 1 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目 ×…開講されていない(履修できない)科目

○印必修	授業科目	年次及び単位数					対象学科													備考	開講区分
		1	2	3	4	計	経済	地域経済	経営	経営情報	法律	政治	日本文化	英米文化	社会環境工	建築	電子情報工	生命工			
○	言語領域 (言語)																			必修4単位含み 10単位以上必修	一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目
	世界の言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本語学特論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本語学特論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本語学実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	対照言語学	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
英語学概論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語				
英語学概論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語				
○	言語領域 (外国語)																		2単位以上必修	一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 人文学部の学生のみを対象に開講 人文学部専門科目	
	英語コミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	英語コミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	英語コミュニケーション III		1			1	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○			
	英語コミュニケーション IV		1			1	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○			
	CommunicationSkills I	2				2	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×			
CommunicationSkills II	2				2	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×				
○	教育領域																		必修8単位含み 12単位以上必修	一般教育科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目	
	コンピュータ科学	2				2	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○			
	日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本語教育学特論			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本語教育演習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
日本語教育特別演習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語				
○	社会・文化・地域領域																		8単位以上必修	一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目	
	人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本文化概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本文化概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本史概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	日本史概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	ヨーロッパ文化概論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	キリスト教文化論	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	アイヌ文化論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
	アイヌ文化論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語			
アジア地域論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語				
アジア地域論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	日語	日語	日語				
計	50	20	18	0	88																

## 2016 年度入学者 適用

### 2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目  
 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分		
		1	2	3	4	計	経 済	地 域 経 済	経 営	法 律	政 治	日 本 文 化			英 米 文 化	
○ ○	言語領域 (言語)															
	世界の言語と文化 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学特論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学特論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語発声実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	対照言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
英語学概論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
英語学概論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
言語領域 (外国語)																
英語コミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	○				
英語コミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	○				
CommunicationSkills I	2				2	×	×	×	×	×	○	○				
CommunicationSkills II	2				2	×	×	×	×	×	○	○				
教育領域																
コンピュータ科学	2				2	×	×	×	○	○	○	○				
日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育学特論			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育演習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育特別演習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
社会・文化・地域領域																
人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○				
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文化概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文化概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本史概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本史概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
ヨーロッパ文化概論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
キリスト教文化論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アイヌ文化論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アイヌ文化論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アジア地域論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アジア地域論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
計		50	18	18	0	86										



# 開講科目一覧および年次配当

2014～2015 年度入学者 適用

## 1 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授業科目	年次及び単位数					対象学科													備考	開講区分
		1	2	3	4	計	経済	地域経済	経営	経営情報	法律	政治	日本文化	英米文化	社会環境工	建築	電子情報工	生命工			
○	言語領域 (言語)																			必修4単位含み 10単位以上必修	一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目
	世界の言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○			
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○			
	日本語学特論 I				2	2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○			
	日本語学特論 II			2	2	2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○			
	日本語学実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○			
	対照言語学	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○			
英語学概論 I	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
英語学概論 II	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
言語領域 (外国語)																			2単位以上必修	一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 人文学部の学生のみを対象に開講 人文学部専門科目 人文学部専門科目	
オーラルコミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
オーラルコミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
オーラルコミュニケーション III		1			1	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○				
オーラルコミュニケーション IV		1			1	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○				
CommunicationSkills I	2				2	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×				
CommunicationSkills II	2				2	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×				
教育領域																			必修8単位含み 12単位以上必修	一般教育科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目	
コンピュータ科学	2				2	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○				
日本語教授法 I	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本語教授法 II	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本語教育学特論	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本語教育演習	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本語教育特別演習	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
社会・文化・地域領域																			8単位以上必修	一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目	
人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本文化概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本文化概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本史概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
日本史概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
ヨーロッパ文化概論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
キリスト教文化論	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
アイヌ文化論 I	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
アイヌ文化論 II	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
アジア地域論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
アジア地域論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○	○				
計	50	20	18	0	88																

## 2014～2015 年度入学者 適用

### 2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目  
 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分			
		1	2	3	4	計	経 済	地 域 経 済	経 営	法 律	政 治	日 本 文 化			英 米 文 化		
○ ○	言語領域 (言語)																
	世界の言語と文化 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			必修4単位含み 10単位以上必修	一般教育科目
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
	日本語学特論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
	日本語学特論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
	日本語学実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
	対照言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
英語学概論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目		
英語学概論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目		
言語領域 (外国語)															2単位以上必修		
オーラルコミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	○			人文学部の学生のみを対象に開講	一般教育科目	
オーラルコミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
CommunicationSkills I	2				2	×	×	×	×	×	○	○				人文学部専門科目	
CommunicationSkills II	2				2	×	×	×	×	×	○	○				人文学部専門科目	
教育領域																	
コンピュータ科学	2				2	×	×	×	○	○	○	○			必修8単位含み 12単位以上必修	一般教育科目	
日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教育学特論			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教育演習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教育特別演習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
社会・文化・地域領域																	
人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○			8単位以上必修	一般教育科目	
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○				一般教育科目	
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本文学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本文学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本史概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本史概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
ヨーロッパ文化概論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
キリスト教文化論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
アイヌ文化論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
アイヌ文化論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
アジア地域論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
アジア地域論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目		
計		50	18	18	0	86											



## 2011～2013 年度入学者 適用

### 2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目  
 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分		
		1	2	3	4	計	経 済	地 域 経 済	経 営	法 律	政 治	日 本 文 化			英 米 文 化	
○ ○	言語領域 (言語)															
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	世界の言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	専門言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○			
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本語学 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本語史		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
対照言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語発声実習		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本語表現法		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
	言語領域 (外国語)															
	オーラルコミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	×			
	オーラルコミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	×			
	Listening I	1				1	×	×	×	×	×	×	○			
	Listening II	1				1	×	×	×	×	×	×	○			
	Speaking I	1				1	×	×	×	×	×	×	○			
	Speaking II	1				1	×	×	×	×	×	×	○			
○ ○ ○ ○	教育領域															
	コンピュータ科学	2				2	×	×	×	○	○	○	○			
	日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	異文化理解論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○			
	異文化間教育学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語教育演習 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語教育演習 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	社会・文化・地域領域															
	人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○			
	アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本文学史 III	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本文学史 IV	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本史概論 III		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本史概論 IV		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本文化史 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本文化史 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	アイヌ文化論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	アイヌ文化論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
宗教文化論			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
計		48	24	16	0	88										

## 2005~2010 年度入学者 適用

### 1 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目 ×…開講されていない(履修できない) 科目

○印必修	授業科目	年次及び単位数					対象学科											備考	開講区分	
		1	2	3	4	計	法律	政治	経済	地域経済	経営	経営情報	日本文化	英米文化	社会環境工	建築	電子情報工			
	言語領域(言語)																		必修4単位含み 10単位以上必修	共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部英米文化学科専門科目 人文学部英米文化学科専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部専門科目 人文学部日本文化学科専門科目
○	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2単位以上必修 英米文化学科以外の学生を対象に開講 人文学部の学生のみを対象に開講	共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	世界言語文化概説	2				2	×	×	○	○	×	×	○	○	○	○	○			
	言語学概論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	言語学概論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	専門言語学 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	専門言語学 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本語学概論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本語学概論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本語学 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本語学 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	対照言語学 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	対照言語学 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本語発声実習		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本語表現法		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	言語領域(外国語)																	2単位以上必修 英米文化学科以外の学生を対象に開講 人文学部の学生のみを対象に開講	共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目	
	オーラルコミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○			
	オーラルコミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○			
	オーラルコミュニケーション III		1			1	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○			
	オーラルコミュニケーション IV		1			1	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○			
	Listening I	1				1	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×			
	Listening II	1				1	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×			
	Speaking I	1				1	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×			
	Speaking II	1				1	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×			
○	教育領域																	必修8単位含み 12単位以上必修	共通基礎科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部英米文化学科専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目	
○	コンピュータ科学	2				2	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○			
○	日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
○	日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
○	日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
○	日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	異文化理解論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語			
	異文化間教育学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本語教育演習 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本語教育演習 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	社会・文化・地域領域																	8単位以上必修	共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 共通基礎科目 共通基礎科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目	
	コミュニケーション論 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	コミュニケーション論 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	日本近現代史論	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	日本現代史論	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	国際事情	2				2	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○			
	アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本文学史 III	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本文学史 IV	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本史概論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本史概論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本史概論 III		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本史概論 IV		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本文学文化史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	日本文学文化史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	アジア文化論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	アジア文化論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	アイヌ文化論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	アイヌ文化論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	宗教文化論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
	宗教文化論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語	日語	日語	日語			
計		46	34	18	0	98														

※2008年度以前入学生は「日語」、2009年度以降入学生は「○」

## 2005～2010 年度入学者 適用

### 2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目  
×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分			
		1	2	3	4	計	法律	政治	経済	地域経済	経営	日本文化			英米文化		
○ ○	言語領域 (言語)																
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○		必修4単位含み 10単位以上必修	共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 人文学部英米文化学科専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部専門科目 人文学部日本文化学科専門科目	
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○					
	世界言語文化概説	2				2	×	×	○	○	×	○	○				
	専門言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○				
	日本語概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
	日本語概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
	日本語学 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
	日本語学 II		2	2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
	日本語史		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
対照言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
日本語発声実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語					
日本語表現法	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語					
言語領域 (外国語)																	
オーラルコミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	×	2単位以上必修 英米文化学科以外の学生を対象に開講 英米文化学科の学生のみを対象に開講	共通基礎科目 共通基礎科目 人文学部英米文化学科専門科目 人文学部英米文化学科専門科目 人文学部英米文化学科専門科目 人文学部英米文化学科専門科目			
オーラルコミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	×					
Listening I	1				1	×	×	×	×	×	×	○					
Listening II	1				1	×	×	×	×	×	×	○					
Speaking I	1				1	×	×	×	×	×	×	○					
Speaking II	1				1	×	×	×	×	×	×	○					
教育領域																	
コンピュータ科学	2				2	○	○	×	×	×	○	○	必修8単位含み 12単位以上必修	共通基礎科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部英米文化学科専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目			
日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
異文化理解論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
異文化間教育学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
日本語教育演習 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
日本語教育演習 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
社会・文化・地域領域																	
コミュニケーション論 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	8単位以上必修	共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 共通基礎科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目 人文学部日本文化学科専門科目			
コミュニケーション論 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○					
日本近現代史論	2				2	○	○	○	○	○	○	○					
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○					
国際事情	2				2	○	○	×	×	○	○	○					
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○					
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語					
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語					
日本文学史 III	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語					
日本文学史 IV	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語					
日本文学史概論 III		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	※					
日本史概論 IV		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	※					
日本文化史 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語					
日本文化史 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語					
アイヌ文化論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
アイヌ文化論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
宗教文化論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					
計		42	24	16	0	82											

※2008年度以前入学生は「日語」、2009年度以降入学生は「○」

# 日本語教員養成課程科目 講義概要索引 (2017年度以降入学生用)

## 【1部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①			-	Communication Skills I	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②			-	Communication Skills II	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	5	17115	アイヌ文化論 I	2	高橋 靖以	2	41		21
	②	水	5	17116	アイヌ文化論 II	2	高橋 靖以	2	41		21
	①	月	5	17117	アジア地域論 I	2	小坂みゆき	3	22		22
	②	金	5	17118	アジア地域論 II	2	風戸 真理	3	AV4		22
	①	金	2	17125	英語学概論 I	2	上野 誠治	2	C31		26
	②	火	5	17126	英語学概論 II	2	米坂スザンヌ	2	C31		26
	②	火	4	17127	英語学特論 I	2	上野 誠治	3	D50		27
	②	火	3	17128	英語学特論 II	2	田中 洋也	3	16		27
	①	火	5	17178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	15		28
	①	月	4	17424	対照言語学	2	呉 泰均	2	C31		31
○	①	金	4	17432	日本語学概論 I	2	徳永 良次	1	D30		32
○	②	金	4	17433	日本語学概論 II	2	徳永 良次	1	D30		33
	①	金	2	17434	日本語学特論 I	2	菅 泰雄	3	21		34
	②	金	2	17435	日本語学特論 II	2	徳永 良次	3	33		34
	①	水	3	17436	日本語教育演習	2	國岡 洋亮	3	C30		35
	①	木	4	17437	日本語教育学特論	2	伊藤 早苗	3	15		36
	②	集	3	17438	日本語教育特別演習	2	中川かず子	3	-		37
○	①	金	2	17439	日本語教授法 I	2	中川かず子	2	AV4		37
○	②	金	2	17440	日本語教授法 II	2	中川かず子	2	AV4		38
○	①	月	2	17441	日本語教授法 III	2	須藤むつ子	3	AV4		38
○	①	月	3	17442	日本語教授法 III	2	須藤むつ子	3	AV4		38
○	②	月	2	17443	日本語教授法 IV	2	須藤むつ子	3	AV4		39
○	②	月	3	17444	日本語教授法 IV	2	須藤むつ子	3	AV4		39
	①	火	3	17447	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	初回講義プレースメントテストにて選考	41
	①	火	4	17448	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	初回講義プレースメントテストにて選考	41
	①	金	2	17457	日本史概論 I	2	追塩 千尋	1	32	英米文化学科は2年次開講	41
	②	金	2	17458	日本史概論 II	2	郡司 淳	1	34	英米文化学科は2年次開講	42
	①	金	4	17461	日本文化概論 I	2	鈴木 英之	1	32	英米文化学科は2年次開講	43
	②	水	5	17462	日本文化概論 II	2	吉村 悠介	1	34	英米文化学科は2年次開講	43
	①	月	5	17463	日本文学史 I	2	木谷 満	1	34	英米文化学科は2年次開講	44
	②	金	3	17464	日本文学史 II	2	田中 綾	1	33	英米文化学科は2年次開講	44
	①	火	5	17511	ヨーロッパ文化概論	2	小柳 敦史	2	16		46

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目/共通基礎科目用の講義概要を参照してください。  
 ※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS! または人文学部事務室前にある閲覧用時間割で確認してください。

## 注 意

講義概要中、上部の「科目名」「単位数」「開講期」「開講年次」欄の括弧内に記載された内容は、2014年度以降入学生には該当しないので注意してください。

2013年度以前入学生は、原則括弧内の情報が該当しますが、記載の条件や名称が同じ場合は括弧書きしていません。

## 【2部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補足等	参照頁
	①	-	-	-	Communication Skills I	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②	-	-	-	Communication Skills II	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	1	18115	アイヌ文化論Ⅰ	2	高橋 靖以	2	42		21
	②	水	1	18116	アイヌ文化論Ⅱ	2	高橋 靖以	2	50		21
	①	月	2	18117	アジア地域論Ⅰ	2	小坂みゆき	3	C30		22
	②	金	1	18118	アジア地域論Ⅱ	2	風戸 真理	3	AV4		22
	①	土	1	18125	英語学概論Ⅰ	2	上野 誠治	2	11		26
	②	土	1	18126	英語学概論Ⅱ	2	米坂スザンヌ	2	AV2		26
	②	水	2	18127	英語学特論Ⅰ	2	上野 誠治	3	29		27
	②	火	1	18128	英語学特論Ⅱ	2	田中 洋也	3	25		27
	①	水	1	18178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	AV3		28
	②	火	1	18424	対照言語学	2	呉 泰均	2	34		31
○	①	水	2	18432	日本語学概論Ⅰ	2	菅 泰雄	1	AV3		32
○	②	水	1	18433	日本語学概論Ⅱ	2	菅 泰雄	1	C30		33
	①	水	1	18434	日本語学特論Ⅰ	2	菅 泰雄	3	AV1		34
	②	金	2	18435	日本語学特論Ⅱ	2	徳永 良次	3	AV3		34
○	①	月	2	18439	日本語教授法Ⅰ	2	中川かず子	2	AV4		37
○	②	月	2	18440	日本語教授法Ⅱ	2	中川かず子	2	AV4		38
○	①	木	1	18441	日本語教授法Ⅲ	2	歌代 崇史	3	16		39
○	②	木	1	18442	日本語教授法Ⅳ	2	歌代 崇史	3	16		40
	①	月	1	18436	日本語教育演習	2	國岡 洋亮	3	20		35
	①	火	1	18437	日本語教育学特論	2	伊藤 早苗	3	25		36
	②	集	2	18438	日本語教育特別演習	2	中川かず子	3	-		37
	②	火	1	18447	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4		41
	①	金	2	18457	日本史概論Ⅰ	2	追塩 千尋	1	20	英米文化学科は2年次開講	41
	②	土	1	18458	日本史概論Ⅱ	2	郡司 淳	1	11	英米文化学科は2年次開講	42
	①	土	2	18461	日本文化概論Ⅰ	2	鈴木 英之	1	21	英米文化学科は2年次開講	43
	②	月	2	18462	日本文化概論Ⅱ	2	吉村 悠介	1	15	英米文化学科は2年次開講	43
	①	月	1	18463	日本文学史Ⅰ	2	木谷 満	1	34	英米文化学科は2年次開講	44
	②	土	2	18464	日本文学史Ⅱ	2	田中 綾	1	20	英米文化学科は2年次開講	44
	①	水	2	18511	ヨーロッパ文化概論	2	小柳 敦史	2	25		46

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目／共通基礎科目用の講義概要を参照してください。  
 ※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS! または人文学部事務室前にある閲覧用時間割で確認してください。

## 注 意

講義概要中、上部の「科目名」「単位数」「開講期」「開講年次」欄の括弧内に記載された内容は、2014年度以降入学生には該当しないので注意してください。

2013年度以前入学生は、原則括弧内の情報が該当しますが、記載の条件や名称が同じ場合は括弧書きしていません。



# 日本語教員養成課程科目 講義概要索引 (2014～2016 年度入学生用)

## 【1部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①			-	Communication Skills I	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②			-	Communication Skills II	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	5	17115	アイヌ文化論 I	2	高橋 靖以	2	41		21
	②	水	5	17116	アイヌ文化論 II	2	高橋 靖以	2	41		21
	①	月	5	17117	アジア地域論 I	2	小坂みゆき	3	22		22
	②	金	5	17118	アジア地域論 II	2	風戸 真理	3	AV4		22
	①	金	2	17125	英語学概論 I	2	上野 誠治	2	C31		26
	②	火	5	17126	英語学概論 II	2	米坂スザンヌ	2	C31		26
	①	火	5	17178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	15		28
	①	月	4	17424	対照言語学	2	呉 泰均	2	C31		31
○	①	金	4	17432	日本語学概論 I	2	徳永 良次	1	D30		32
○	②	金	4	17433	日本語学概論 II	2	徳永 良次	1	D30		33
	①	金	2	17434	日本語学特論 I	2	菅 泰雄	3	21		34
	②	金	2	17435	日本語学特論 II	2	徳永 良次	3	33		34
	①	水	3	17436	日本語教育演習	2	國岡 洋亮	3	C30		35
	①	木	4	17437	日本語教育学特論	2	伊藤 早苗	3	15		36
	②	集	3	17438	日本語教育特別演習	2	中川かず子	3	-		37
○	①	金	2	17439	日本語教授法 I	2	中川かず子	2	AV4		37
○	②	金	2	17440	日本語教授法 II	2	中川かず子	2	AV4		38
○	①	月	2	17441	日本語教授法 III	2	須藤むつ子	3	AV4		38
○	①	月	3	17442	日本語教授法 III	2	須藤むつ子	3	AV4		38
○	②	月	2	17443	日本語教授法 IV	2	須藤むつ子	3	AV4		39
○	②	月	3	17444	日本語教授法 IV	2	須藤むつ子	3	AV4		39
	①	火	3	17447	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	初回講義プレースメントテストにて選考	41
	①	火	4	17448	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	初回講義プレースメントテストにて選考	41
	①	金	2	17457	日本史概論 I	2	追塩 千尋	1	32	英米文化学科は2年次開講	41
	②	金	2	17458	日本史概論 II	2	郡司 淳	1	34	英米文化学科は2年次開講	42
	①	金	4	17461	日本文化概論 I	2	鈴木 英之	1	32	英米文化学科は2年次開講	43
	②	水	5	17462	日本文化概論 II	2	吉村 悠介	1	34	英米文化学科は2年次開講	43
	①	月	5	17463	日本文学史 I	2	木谷 満	1	34	英米文化学科は2年次開講	44
	②	金	3	17464	日本文学史 II	2	田中 綾	1	33	英米文化学科は2年次開講	44
	①	火	5	17511	ヨーロッパ文化概論	2	小柳 敦史	2	16		46

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目／共通基礎科目用の講義概要を参照してください。  
 ※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS! または人文学部事務室前にある閲覧用時間割で確認してください。

## 注 意

講義概要中、上部の「科目名」「単位数」「開講期」「開講年次」欄の括弧内に記載された内容は、2014年度以降入学生には該当しないので注意してください。

2013年度以前入学生は、原則括弧内の情報が該当しますが、記載の条件や名称が同じ場合は括弧書きしていません。

## 【2部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①	-	-	-	Communication Skills I	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②	-	-	-	Communication Skills II	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	1	18115	アイヌ文化論Ⅰ	2	高橋 靖以	2	42		21
	②	水	1	18116	アイヌ文化論Ⅱ	2	高橋 靖以	2	50		21
	①	月	2	18117	アジア地域論Ⅰ	2	小坂みゆき	3	C30		22
	②	金	1	18118	アジア地域論Ⅱ	2	風戸 真理	3	AV4		22
	①	土	1	18125	英語学概論Ⅰ	2	上野 誠治	2	11		26
	②	土	1	18126	英語学概論Ⅱ	2	米坂スザンヌ	2	AV2		26
	①	水	1	18178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	AV3		28
	②	火	1	18424	対照言語学	2	呉 泰均	2	34		31
○	①	水	2	18432	日本語学概論Ⅰ	2	菅 泰雄	1	AV3		32
○	②	水	1	18433	日本語学概論Ⅱ	2	菅 泰雄	1	C30		33
	①	水	1	18434	日本語学特論Ⅰ	2	菅 泰雄	3	AV1		34
	②	金	2	18435	日本語学特論Ⅱ	2	徳永 良次	3	AV3		34
○	①	月	2	18439	日本語教授法Ⅰ	2	中川かず子	2	AV4		37
○	②	月	2	18440	日本語教授法Ⅱ	2	中川かず子	2	AV4		38
○	①	木	1	18441	日本語教授法Ⅲ	2	歌代 崇史	3	16		39
○	②	木	1	18442	日本語教授法Ⅳ	2	歌代 崇史	3	16		40
	①	月	1	18436	日本語教育演習	2	國岡 洋亮	3	20		35
	①	火	1	18437	日本語教育学特論	2	伊藤 早苗	3	25		36
	②	集	2	18438	日本語教育特別演習	2	中川かず子	3	-		37
	②	火	1	18447	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4		41
	①	金	2	18457	日本史概論Ⅰ	2	追塩 千尋	1	20	英米文化学科は2年次開講	41
	②	土	1	18458	日本史概論Ⅱ	2	郡司 淳	1	11	英米文化学科は2年次開講	42
	①	土	2	18461	日本文化概論Ⅰ	2	鈴木 英之	1	21	英米文化学科は2年次開講	43
	②	月	2	18462	日本文化概論Ⅱ	2	吉村 悠介	1	15	英米文化学科は2年次開講	43
	①	月	1	18463	日本文学史Ⅰ	2	木谷 満	1	34	英米文化学科は2年次開講	44
	②	土	2	18464	日本文学史Ⅱ	2	田中 綾	1	20	英米文化学科は2年次開講	44
	①	水	2	18511	ヨーロッパ文化概論	2	小柳 敦史	2	25		46

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目／共通基礎科目用の講義概要を参照してください。  
 ※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS! または人文学部事務室前にある閲覧用時間割で確認してください。

## 注 意

講義概要中、上部の「科目名」「単位数」「開講期」「開講年次」欄の括弧内に記載された内容は、2014年度以降入学生には該当しないので注意してください。

2013年度以前入学生は、原則括弧内の情報が該当しますが、記載の条件や名称が同じ場合は括弧書きしていません。

# 日本語教員養成課程科目 講義概要索引 (2005～2013 年度入学生用)

## 【1部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①	-	-	-	Listening I	1	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②	-	-	-	Listening II	1	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	-	-	-	Speaking I	1	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	-	-	-	Speaking II	1	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②	-	-	-	日本語表現法	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	5	17690	アイヌ文化論 I	2	高橋 靖以	2	41		21
	②	水	5	17691	アイヌ文化論 II	2	高橋 靖以	2	41		21
	①	月	5	17692	アジア文化論 I	2	小坂みゆき	3	22		22
	②	金	5	17693	アジア文化論 II	2	風戸 真理	3	AV4		22
	①	木	4	17862	異文化間教育学	2	伊藤 早苗	2	15		36
	①	金	5	17550	異文化理解論	2	パロースティーン	2	マルチ		23
	①	金	5	17551	異文化理解論	2	ブシャー・ジェレミ	2	コンA3		23
	①	火	4	17789	言語学概論 I	2	上野 誠治	2	11		29
	②	火	2	17790	言語学概論 II	2	上野 誠治	2	14		29
	①	火	5	17788	宗教文化論 I	2	佐藤 貴史	2	15		28
	②	火	4	17969	宗教文化論 II	2	佐藤 貴史	2	D42		46
	②	火	3	17705	専門言語学 I	2	田中 洋也	3	16		27
	②	金	2	17706	専門言語学 II	2	上野 誠治	3	11		30
	①	月	4	17850	対照言語学 I	2	呉 泰均	2	C31		31
	②	金	3	17851	対照言語学 II	2	中川かず子	2	12		31
	①	金	2	17859	日本語学 I	2	菅 泰雄	2	21		34
	②	金	2	17860	日本語学 II	2	徳永 良次	3	33		34
○	①	金	4	17432	日本語学概論 I	2	徳永 良次	1	D30		32
○	②	金	4	17433	日本語学概論 II	2	徳永 良次	1	D30		33
	①	水	3	17861	日本語教育演習 I	2	國岡 洋亮	3	C30		35
	②	集	3	17863	日本語教育演習 II	2	中川かず子	3	-		37
○	①	金	2	17439	日本語教授法 I	2	中川かず子	2	AV4		37
○	②	金	2	17440	日本語教授法 II	2	中川かず子	2	AV4		38
○	①	月	2	17441	日本語教授法 III	2	須藤むつ子	3	AV4		38
○	①	月	3	17442	日本語教授法 III	2	須藤むつ子	3	AV4		38
○	②	月	2	17443	日本語教授法 IV	2	須藤むつ子	3	AV4		39
○	②	月	3	17444	日本語教授法 IV	2	須藤むつ子	3	AV4		39
	①	火	2	17864	日本語史	2	徳永 良次	2	12		40
	①	火	3	17869	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	初回講義プレースメントテストにて選考	41
	①	火	4	17870	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	初回講義プレースメントテストにて選考	41
	②	金	2	17880	日本史概論 III	2	郡司 淳	2	34		42
	①	金	3	17882	日本史概論 IV	2	郡司 淳	2	32		42
	①	月	5	17885	日本文学史 I	2	木谷 満	1	34		44
	②	月	5	17887	日本文学史 II	2	木谷 満	1	15		45
	②	金	3	17886	日本文学史 III	2	田中 綾	1	33		44
	①	金	5	17888	日本文学史 IV	2	田中 綾	1	13		45
	①	金	4	17883	日本文化史 I	2	鈴木 英之	1	32		43
	②	水	5	17884	日本文化史 II	2	吉村 悠介	1	34		43

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目／共通基礎科目用の講義概要を参照してください。  
 ※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS! または人文学部事務室前にある閲覧用時間割で確認してください。

## 注 意

講義概要中、上部の「科目名」「単位数」「開講期」「開講年次」欄の括弧内に記載された内容は、2014 年度以降入学生には該当しないので注意してください。

2013 年度以前入学生は、原則括弧内の情報が該当しますが、記載の条件や名称が同じ場合は括弧書きしていません。

## 【2部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補足等	参照頁
	①	-	-	-	Listening I	1	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②	-	-	-	Listening II	1	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	-	-	-	Speaking I	1	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	-	-	-	Speaking II	1	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②	-	-	-	日本語表現法	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	1	18690	アイヌ文化論Ⅰ	2	高橋 靖以	3	42		21
	②	水	1	18691	アイヌ文化論Ⅱ	2	高橋 靖以	3	50		21
	①	火	1	18862	異文化間教育学	2	伊藤 早苗	2	25		36
	①	木	2	18550	異文化理解論	2	パロー スティーブン	2	コンA1		24
	①	水	1	18788	宗教文化論	2	佐藤 貴史	2	AV3		28
	②	火	1	18705	専門言語学	2	田中 洋也	3	25		27
	②	火	1	18850	対照言語学	2	呉 泰均	2	34		31
	①	水	1	18859	日本語学Ⅰ	2	菅 泰雄	2	AV1		34
	②	金	2	18860	日本語学Ⅱ	2	徳永 良次	3	AV3		34
○	①	水	2	18432	日本語学概論Ⅰ	2	菅 泰雄	1	AV3		32
○	②	水	1	18433	日本語学概論Ⅱ	2	菅 泰雄	1	C30		33
	①	月	1	18861	日本語教育演習Ⅰ	2	國岡 洋亮	3	20		35
	②	集	2	18863	日本語教育演習Ⅱ	2	中川かず子	3	-		37
○	①	月	2	18439	日本語教授法Ⅰ	2	中川かず子	2	AV4		37
○	②	月	2	18440	日本語教授法Ⅱ	2	中川かず子	2	AV4		38
○	①	木	1	18441	日本語教授法Ⅲ	2	歌代 崇史	3	16		39
○	②	木	1	18442	日本語教授法Ⅳ	2	歌代 崇史	3	16		40
	①	水	1	18864	日本語史	2	徳永 良次	2	A201		40
	②	火	1	18869	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4		41
	②	土	1	18880	日本史概論Ⅲ	2	郡司 淳	2	11		42
	①	水	2	18882	日本史概論Ⅳ	2	郡司 淳	2	20		42
	①	月	1	18885	日本文学史Ⅰ	2	木谷 満	1	34		44
	②	月	1	18887	日本文学史Ⅱ	2	木谷 満	1	14		45
	②	土	2	18886	日本文学史Ⅲ	2	田中 綾	1	20		44
	①	金	2	18888	日本文学史Ⅳ	2	田中 綾	1	13		45
	①	土	2	18883	日本文化史Ⅰ	2	鈴木 英之	2	21		43
	②	月	2	18884	日本文化史Ⅱ	2	吉村 悠介	2	15		43

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目／共通基礎科目用の講義概要を参照してください。  
 ※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS! または人文学部事務室前にある閲覧用時間割で確認してください。

## 注 意

講義概要中、上部の「科目名」「単位数」「開講期」「開講年次」欄の括弧内に記載された内容は、2014年度以降入学生には該当しないので注意してください。

2013年度以前入学生は、原則括弧内の情報が該当しますが、記載の条件や名称が同じ場合は括弧書きしていません。



科目名	アイヌ文化論Ⅰ		
担当者	高橋 靖以		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語 (1部2年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語)		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

この講義では、日本列島の先住民であるアイヌの文化に関し、文化人類学や言語学、口頭伝承研究の立場から解説をおこないます。講義では、特に文化と言語の関りを重視し、「言語からみた文化」を探ることを一つのテーマとします。

(学習目標)

講義で取り上げる様々なトピックを通して、アイヌ文化に関する理解を深めることを目標とします。また、アイヌ文化・アイヌ語を例として、文化人類学や言語学の考え方に親しむことも講義の目標の一つです。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 生態人類学からみたアイヌ文化
- 第3回 アイヌ文化成立論とその問題点
- 第4回 現代のアイヌ文化をめぐる諸問題
- 第5回 アイヌ語の地域差と歴史
- 第6回 アイヌ語の現状とドキュメンテーション
- 第7回 言語人類学からみたアイヌ文化
- 第8回 時間の表現からみたアイヌ文化
- 第9回 空間の表現からみたアイヌ文化
- 第10回 アイヌ語地名とその研究の諸問題
- 第11回 民俗分類からみたアイヌ文化
- 第12回 親族名称からみたアイヌ文化
- 第13回 数の表現からみたアイヌ文化
- 第14回 色彩の表現からみたアイヌ文化
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

講義中に指示する参考文献に基づき、毎回の予習と学習内容のまとめをおこなってください。

●評価方法・基準

講義中に指示する課題(20%)と定期試験(80%)で評価をおこないます。課題の実施結果については講義内でコメントします。

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

特になし。

●参考書

講義中に指示します。

科目名	アイヌ文化論Ⅱ		
担当者	高橋 靖以		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語 (1部2年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語)		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

この講義では、日本列島の先住民であるアイヌの文化に関し、文化人類学や言語学、口頭伝承研究の立場から解説をおこないます。講義では、特にアイヌの口頭伝承を取り上げ、その文化的・歴史的背景を探っていきます。

(学習目標)

講義で取り上げる様々なトピックを通して、アイヌ文化に関する理解を深めることを目標とします。また、アイヌ文化・アイヌ語・アイヌ文学を例として、文化人類学や言語学の考え方に親しむことも講義の目標の一つです。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 アイヌ口頭伝承とその分類
- 第3回 アイヌの歌謡とその分類
- 第4回 呪文、祈詞、謎々などの口頭伝承
- 第5回 神話の形式とその内容
- 第6回 神話から探るアイヌ文化
- 第7回 散文説話の形式とその内容
- 第8回 散文説話と歴史研究
- 第9回 事実談とその内容
- 第10回 英雄叙事詩の形式とその内容
- 第11回 英雄叙事詩と歴史研究
- 第12回 アイヌ口頭伝承の組み立て
- 第13回 アイヌ口頭伝承における「1人称叙述」の問題
- 第14回 アイヌ口頭伝承の現在
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

講義中に指示する参考文献に基づき、毎回の予習と学習内容のまとめをおこなってください。

●評価方法・基準

講義中に指示する課題(20%)と定期試験(80%)で評価をおこないます。課題の実施結果については講義内でコメントします。

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

特になし。

●参考書

講義中に指示します。

科目名	アジア地域論Ⅰ（アジア文化論Ⅰ）		
担当者	小坂みゆき		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部3年 日・英・日語 2部 英)		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

アジアにおける人々の暮らしの移り変わりと、それらが相互の影響を受けながら独自に発展、変遷して今日に至っていることを学ぶ。アジアの人々の暮らしのすがたは、その地域での環境的背景や社会的背景などで様々だが、この中には西洋とは異なる共通性を見ることが出来る。暮らしの移り変わりを時間的歴史的な流れのなかで見ていくことを縦軸とし、それぞれの地域の同時期での暮らしの姿を見ていくことを横軸として、相違点や共通性、それが生じる要因について考察する。

講義は日本、韓国、中国を中心とするが、それ以外のアジアの地域についても触れていく。15回の講義は、食、衣服、儒教、家族、年中行事、人生儀礼という流れで進めていくが、講義の中で出てくる様々な事柄を、自らの将来の生活の中で役立てて欲しい。(学習目標)

日本、中国、韓国の暮らしの姿がどのように形成されてきたかを理解し、互いに影響しあってきたことを具体的な事実から学ぶ。グローバル化により世界に広げられた生活の平均化と対比し考察する。

●授業計画

- 第1回 講義の方針：導入
- 第2回 アジアの人々の生活と食－①米の文化
- 第3回 アジアの人々の生活と食－②小麦の文化
- 第4回 アジアの人々の生活と食－③麺の文化
- 第5回 アジアの人々の生活と食－④保存食
- 第6回 アジアの人々の生活と衣服－民族衣装とは？
- 第7回 アジアの人々の生活と衣服－民族衣装が変わるとき－中国の民族衣装
- 第8回 アジアにおける儒教－①日本、韓国、中国
- 第9回 アジアにおける儒教と人生儀礼－②祖先崇拜
- 第10回 アジアにおける儒教と人生儀礼－③結婚式
- 第11回 アジアにおける儒教と人生儀礼④還暦祝
- 第12回 アジアにおける年中行事－日本、韓国、中国
- 第13回 アジアにおけるグローバル化－日本の中のアジア
- 第14回 アジアのディアスポラ－中国のコリアン
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

日ごろから、テレビや新聞などの記事に注意し、アジア地域への興味、関心をもつ。小テスト、レポートの準備を行う。

●評価方法・基準

授業中に課すコメント用紙への記入と、中間に行う小テスト、レポートで評価します。必要に応じては受講態度も成績に加味します。

小テストの結果については授業内で行う。  
レポートの結果については Goals で公表する。

●履修上の留意点

授業は講義形式で行うが、映像資料を用いて出席者への質問やコメントを織り交ぜてすすめる。日頃から新聞などメディアで報道されるアジアに関する話題に触れ、関心を持つようにしましょう。

●教科書

特になし。必要に応じてプリントを配布する

●参考書

必要に応じて紹介する

科目名	アジア地域論Ⅱ（アジア文化論Ⅱ）		
担当者	風戸 真理		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部3年 日・英・日語 2部 英)		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

モンゴル地域研究を事例として、日本の暮らしと比較しながら、アジア地域の人びとの生活と社会について学ぶ。

(学習目標)

異文化であるアジアの他地域への理解を深めるとともに、アジア地域構成員の一人としての自己の位置づけを知る。

●授業計画

- 第1回 講義の概要
- 第2回 モンゴル国の遊牧生活/発表分担
- 第3回 教育
- 第4回 ジェンダーと労働
- 第5回 ファッションと流行
- 第6回 宗教と社会
- 第7回 音楽
- 第8回 民主化
- 第9回 市場経済化・私有化
- 第10回 牧畜研究の意義
- 第11回 これまでのまとめ
- 第12回 牧畜経済
- 第13回 鉱業経済
- 第14回 環境問題（草原）
- 第15回 環境問題（都市）

●準備学習の内容

毎授業後に小レポート（イーラーニング）を提出すること。  
毎週、教科書の該当部分を読んでくること（範囲は講義時に指示）。

発表担当回には、班員と協力して、発表準備をおこなうこと。

●評価方法・基準

平常点〔授業への取り組み・小レポート（イーラーニング）・発表〕65%、期末点35%により総合的に評価する。期末試験の受験は必須です。

小レポート課題の結果については、中盤以降の授業内で発表する。

発表課題に対しては、次回以降に採点し、返却する。  
期末試験は返却しない。

●履修上の留意点

上記の内容を中心とした15回の講義をおこないます。内容は学習状況に応じて調整します。

15週のうち1-2週をオンライン（e-learning）にて実施予定です。  
授業中の私語・内職・飲食は禁止です。

●教科書

小長谷有紀・前川愛編著『現代モンゴルを知るための50章』明石書店、2014年。

●参考書

適宜プリントを配付します。  
資料の予備は保管しません。受講者同士でコピーをすること。

科目名	Cultural Perspectives in English I (異文化理解論)		
担当者	バロー スティーブン    ブシャー ジェレミ		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英 (1部2年 英・日語)		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

This is an inquiry-based course in which the teacher provides suitable content and guiding questions related to the development of intercultural understanding. Specifically, the course looks at how English education can help Japanese secondary school students develop intercultural understanding. The course is divided into two cycles; the first cycle (Weeks 1-7) focuses on a PowerPoint presentation on topics related to English as a lingua franca and the teaching of cultural content in the EFL classroom, as specified in MEXT policy documents. Students locate cultural content in actual MEXT-approved EFL textbooks, design appropriate activities aimed at teaching this content, leading to the production and delivery of a small group PowerPoint presentation. In Cycle 2, this course further explores the links between English education and the development of intercultural understanding by having students plan for and take part in a formal debate on the following topic: "English education should begin in the first year of elementary school." Students will receive information and support from both the teacher and their peers, through collaborative exchange. Assessment will comprise of evidence of collaborative exchange, PowerPoint presentations, and participation in a debate.

本科目は、異文化理解能力の獲得に焦点を当て、教師が提示する課題に応える探求型授業である。科目は二段階に分けられ、第一段階(第1～7週)は、文部科学省の政策資料に示される世界共通語としての英語と文化的内容の教育についての発表活動に取り組む。受講者は、文科省検定済英語教科書における文化的内容を理解し、その指導のために適切な学習活動を設計し、グループでの発表を行う。第二段階(第8～15週)では、英語教育と異文化理解の連携を探索し、「英語教育は小学校の1年生から始めるべきか」についてのディベートを行う。受講者は、教師、及び、他の受講者から情報と支援を受けながら協働的な活動を行う。評価は、協働活動、発表、ディベートの取り組みにより行われる。(学習目標)

Students will develop intercultural understanding by first exploring the links between language and culture, and learning about the varieties of English around the world and their cultural roots. Second, students will expand their intercultural understanding by exploring the notion of culture, identifying cultural elements in printed texts, and discovering how cultural content can be integrated within an English classroom. Finally, students will deepen their intercultural understanding by focusing explicitly on English education as a place where Japanese secondary school pupils can develop intercultural understanding. This will be achieved through a debate over the issue of whether English should be taught from the first year of elementary school.

受講者は、言語と文化の関連性の探求、世界の多様な英語とその文化的根元を学ぶことで異文化理解の知識、能力を獲得する。また、受講者は、「文化」の概念の探求、教科書に見られる文化的内容を同定し、英語教育に組み込む方法を学ぶことで異文化理解の知識を拡げる。さらに、受講者は、日本の中学校・高等学校の生徒が異文化理解の知識を獲得できる場として英語教育を捉えることで自らの異文化理解知識を深めることを目標とする。この目標は、授業におけるディベートを通して達成する。

●授業計画

- 第1回 English as Lingua Franca (short lecture, webquest, discussion board post)  
共通語としての英語(短い講義, webquest, ネット上の議論に参加)
- 第2回 Techniques for teaching culture in the English language classroom (discussion board post)  
英語の教室で文化を教える技術(ネット上の議論に参加)
- 第3回 Language education in Japan - MEXT policies and initiatives (short lecture, webquest, discussion board post)  
日本における語学教育-文科省の方針と主導(短い講義, webquest, ネット上の議論に参加)
- 第4回 Introduction to small group presentation Task: How to expand on cultural content within a MEXT-approved textbook  
小グループでの発表作業のイントロ, 文科省公認の教科書の中で文化的な内容を広げる方法
- 第5回 Small group design of appropriate cultural learning activities/Model PowerPoint  
適切な文化を小グループで学ぶ作業, パワーポイントの例
- 第6回 PowerPoint design/Script submission  
パワーポイントの原稿を作成して提出
- 第7回 Revision, rehearsal and delivery of presentation  
発表の訂正, 練習, 実施
- 第8回 Presentation delivery  
発表の実施
- 第9回 Warm-up: Introducing core topic/Students note initial stance on the issue/Whole class brainstorming of core issues related to main topic  
準備. 中心的なテーマの紹介, テーマについての学生の最初の理解, メイン・テーマに関する中心的な問題について, クラス全体でブレインストーミング
- 第10回 Make Pro and Con teams/Teams brainstorm to determine two core arguments to defend particular stance on topic  
賛成と反対のチームを作る. 問題について特定の立場を守るための2つの中心となる議論を決めるためのチームとしてのブレインストーミング
- 第11回 Teams research data or information to back up these two core arguments  
2つの中心となる議論を支持するデータや情報をチームとして調べる
- 第12回 Drafting of constructive speech defending team's two core arguments  
2つの中心となる議論を維持するスピーチの原稿作成
- 第13回 Submission of constructive speech (400 words)  
共同で作成したスピーチ(400語)の提出
- 第14回 Revision of constructive speech/One-on-one practice debate  
作成した原稿の推敲, 一対一のディベートの練習
- 第15回 Main debate/Students revisit initial stance on the issue  
主たるディベート, 学生は問題についての最初の地点に戻る

●準備学習の内容

Students are required to do homework if unable to complete assigned tasks during class time. Due to the collaborative nature of this course, they are strongly recommended to attend all classes.

学生は授業中に課題を完成できない時は宿題とする。この科目は共同作業が大事なので、全クラスに出席する事が非常に重要である。

●評価方法・基準

- Cycle 1: Discussion board tasks: 20%
- 前半: ディスカッション掲示板の作業
- Students' presentation scripts: 10%



学生のプレゼンの原稿  
 PowerPoint file: 10%  
 パワーポイントのファイル  
 Presentation: 10%  
 プレゼン  
 Cycle 2: Constructive speech: 20%  
 後半：議論引き出すスピーチ  
 Final debate performance: 20%  
 デイバートの最終的な評価  
 Debate flow sheet: 10%  
 デイバートの進行

●履修上の留意点

This is a mandatory course for teachers-in-training  
 教職課程には必須の科目です。

●教科書

No textbook will be assigned for this course; teachers will  
 provide relevant materials

教科書は指定されていません。教師が適当な教材を配布しま  
 す。

●参考書

None  
 なし

科目名	Cultural Perspectives in English I (異文化理解論)		
担当者	バロー スティーブン		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	2部2年 日・英 (2部2年 英・日語)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

This is an inquiry-based course in which the teacher provides  
 suitable content and guiding questions related to the develop-  
 ment of intercultural understanding. Specifically, the course looks  
 at how English education can help Japanese secondary school  
 students develop intercultural understanding. The course is  
 divided into two cycles; the first cycle (Weeks 1-7) focuses on a  
 PowerPoint presentation on topics related to English as a lingua  
 franca and the teaching of cultural content in the EFL classroom,  
 as specified in MEXT policy documents. Students locate cultural  
 content in actual MEXT-approved EFL textbooks, design  
 appropriate activities aimed at teaching this content, leading to  
 the production and delivery of a small group PowerPoint  
 presentation. In Cycle 2, this course further explores the links  
 between English education and the development of intercultural  
 understanding by having students plan for and take part in a  
 formal debate on the following topic: "English education should  
 begin in the first year of elementary school." Students will  
 receive information and support from both the teacher and their  
 peers, through collaborative exchange. Assessment will comprise  
 of evidence of collaborative exchange, PowerPoint presentations,  
 and participation in a debate.

本科目は、異文化理解能力の獲得に焦点を当て、教師が提示す  
 る課題に応える探求型授業である。科目は二段階に分けられ、第  
 一段階（第1～7週）は、文部科学省の政策資料に示される世界  
 共通語としての英語と文化的内容の教育についての発表活動に取  
 り組む。受講者は、文科省検定済英語教科書における文化的内容  
 を理解し、その指導のために適切な学習活動を設計し、グループ  
 での発表を行う。第二段階（第8～15週）では、英語教育と異文  
 化理解の連携を探索し、「英語教育は小学校の1年生から始める  
 べきか」についてのディベートを行う。受講者は、教師、及び、  
 他の受講者から情報と支援を受けながら協働的な活動を行う。評  
 価は、協働活動、発表、ディベートの取り組みにより行われる。  
 (学習目標)

Students will develop intercultural understanding by first  
 exploring the links between language and culture, and learning  
 about the varieties of English around the world and their cultural  
 roots. Second, students will expand their intercultural under-  
 standing by exploring the notion of culture, identifying cultural  
 elements in printed texts, and discovering how cultural content  
 can be integrated within an English classroom. Finally, students  
 will deepen their intercultural understanding by focusing  
 explicitly on English education as a place where Japanese  
 secondary school pupils can develop intercultural understanding.  
 This will be achieved through a debate over the issue of whether  
 English should be taught from the first year of elementary school.

受講者は、言語と文化の関連性の探求、世界の多様な英語とそ  
 の文化的根元を学ぶことで異文化理解の知識、能力を獲得する。  
 また、受講者は、「文化」の概念の探求、教科書に見られる文化的  
 内容を同定し、英語教育に組み込む方法を学ぶことで異文化理解  
 の知識を拡げる。さらに、受講者は、日本の中学校・高等学校の  
 生徒が異文化理解の知識を獲得できる場として英語教育を捉える  
 ことで自らの異文化理解知識を深めることを目標とする。この目  
 標は、授業におけるディベートを通して達成する。

## ●授業計画

- 第1回 English as Lingua Franca (short lecture, webquest, discussion board post)  
共通語としての英語 (短い講義, webquest, ネット上の議論に参加)
- 第2回 Techniques for teaching culture in the English language classroom (discussion board post)  
英語の教室で文化を教える技術 (ネット上の議論に参加)
- 第3回 Language education in Japan - MEXT policies and initiatives (short lecture, webquest, discussion board post)  
日本における語学教育—文科省の方針と主導 (短い講義, webquest, ネット上の議論に参加)
- 第4回 Introduction to small group presentation Task: How to expand on cultural content within a MEXT-approved textbook  
小グループでの発表作業のイントロ, 文科省公認の教科書の中で文化的な内容を広げる方法
- 第5回 Small group design of appropriate cultural learning activities/Model PowerPoint  
適切な文化を小グループで学ぶ作業, パワーポイントの例
- 第6回 PowerPoint design/Script submission  
パワーポイントの原稿を作成して提出
- 第7回 Revision, rehearsal and delivery of presentation  
発表の訂正, 練習, 実施
- 第8回 Presentation delivery  
発表の実施
- 第9回 Warm-up: Introducing core topic/Students note initial stance on the issue/Whole class brainstorming of core issues related to main topic  
準備. 中心的なテーマの紹介, テーマについての学生の最初の理解, メイン・テーマに関する中心的な問題について, クラス全体でブレインストーミング
- 第10回 Make Pro and Con teams/Teams brainstorm to determine two core arguments to defend particular stance on topic  
賛成と反対のチームを作る。問題について特定の立場を守るための2つの中心となる議論を決めるためのチームとしてのブレインストーミング
- 第11回 Teams research data or information to back up these two core arguments  
2つの中心となる議論を支持するデータや情報をチームとして調べる
- 第12回 Drafting of constructive speech defending team's two core arguments  
2つの中心となる議論を維持するスピーチの原稿作成
- 第13回 Submission of constructive speech (400 words)  
共同で作成したスピーチ (400語) の提出
- 第14回 Revision of constructive speech/One-on-one practice debate  
作成した原稿の推敲, 一対一のディベートの練習
- 第15回 Main debate/Students revisit initial stance on the issue  
主たるディベート, 学生は問題についての最初の地点に戻る

## ●準備学習の内容

Students are required to do homework if unable to complete assigned tasks during class time. Due to the collaborative nature of this course, they are strongly recommended to attend all classes.

学生は授業中に課題を完成できない時は宿題とする。この科目は共同作業が大事なので, 全クラスに出席する事が非常に重要である。

## ●評価方法・基準

- Cycle 1: Discussion board tasks: 20%  
前半: ディスカッション掲示板の作業  
Students' presentation scripts: 10%

学生のプレゼンの原稿

PowerPoint file: 10%

パワーポイントのファイル

Presentation: 10%

プレゼン

Cycle 2: Constructive speech: 20%

後半: 議論引き出すスピーチ

Final debate performance: 20%

ディベートの最終的な評価

Debate flow sheet: 10%

ディベートの進行

## ●履修上の留意点

This is a mandatory course for teachers-in-training  
教職課程には必須の科目です。

## ●教科書

No textbook will be assigned for this course; teachers will provide relevant materials

教科書は指定されていません。教師が適当な教材を配布します。

## ●参考書

None

なし

科目名	英語学概論Ⅰ		
担当者	上野 誠治		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語 (1部2年 日・英 2部2年 日・英)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

主として、英語学および言語学の形式的な側面を研究する際に必要となる基礎概念とその研究方法を学ぶ。

(学習目標)

- (1) 英語学の基礎となる知識や思考法、研究方法を培う。
- (2) 英語の背後に潜む規則性や原理の探求の醍醐味に触れる。
- (3) 実際に英語を使う場面や英語教育での応用を学ぶ。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス：英語学と言語学  
音韻論①—母音と子音
- 第2回 音韻論②—音節とモーラ、アクセント、イントネーション
- 第3回 形態論①—屈折形態論と派生形態論
- 第4回 形態論②—派生と複合
- 第5回 生成統語論①—句構造、名詞句
- 第6回 生成統語論②—移動
- 第7回 機能的構文論①—文の情報構造
- 第8回 機能的構文論②—視点
- 第9回 語彙意味論①—意味関係、多義
- 第10回 語彙意味論②—可算名詞と不可算名詞、意味役割
- 第11回 認知意味論①—カテゴリー化とプロトタイプ、メトニミー
- 第12回 認知意味論②—抽象概念とメタファー、概念融合
- 第13回 語用論①—発話の論理形式、表意
- 第14回 語用論②—推意、記述的使用と帰属的使用
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

前回までの講義概要（特に、基礎的概念）をよく復習しておくこと。

●評価方法・基準

定期試験（80％）と授業への参加状況（20％）で評価する。試験の結果は、GOALSで確認すること。

●履修上の留意点

全回出席し、真剣に取り組むことを前提とする。

基礎概念を土台にして議論が展開していくので、新出の概念・定義・原理などはよく理解しておく必要がある。わからないままにしておくのではなく、適宜参考文献に当たって理解を深めておく必要がある。

●教科書

三原健一、高見健一（編著）『日英対照 英語学の基礎』くろしお出版.2013年。

●参考書

大津由紀雄（編著）『はじめて学ぶ言語学—ことばの世界をさぐる17章』ミネルヴァ書房

大津由紀雄ほか『言語研究入門』研究社

中島平三『ファンダメンタル英語学』改訂版、ひつじ書房

郡司隆男、西河内泰介『ことばの科学ハンドブック』研究社

科目名	英語学概論Ⅱ		
担当者	米坂 スザンヌ		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語 (1部2年 日・英 2部2年 日・英)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

This course focuses on the spoken English language, introducing key concepts in pragmatics, conversation analysis, and sociolinguistics.

Before class, students will understand key concepts by downloading and reading a handout and/or by watching a video presentation, and (2) completing an on-line quiz or task. In class, students will deepen their understanding of key concepts by (1) asking questions about unclear areas, (2) discussing concepts in small groups, and (3) analyzing linguistic data.

(学習目標)

- (1) To understand key concepts in spoken language
- (2) To apply key concepts to linguistic data

●授業計画

- 第1回 Orientation
- 第2回 Linguistic fundamentals; features of communications systems
- 第3回 Semantics; lexical relations
- 第4回 Deixis
- 第5回 Ambiguity
- 第6回 Speech acts
- 第7回 The cooperative principle; entailment and implicature
- 第8回 Turn-taking
- 第9回 Review of Conversation; Felicity conditions; speech events
- 第10回 Face; FTAs; Positive and negative politeness
- 第11回 Status and connection
- 第12回 Language and gender
- 第13回 Learning gendered language
- 第14回 Overt and covert prestige
- 第15回 Social dialects

●準備学習の内容

Before class, students (1) watch an online video presentation, (2) download and complete an outline, and (3) take an on-line quiz.

●評価方法・基準

Pre-class quizzes: 50%

In-class group work: 50%

●履修上の留意点

Class will be conducted primarily in English.

●教科書

All materials are available on the course website.

●参考書

特になし

科目名	英語学特論Ⅰ（1部 英語学Ⅰ 2部 英語学）		
担当者	上野 誠治		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部3年 英 2部3年 英)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

古英語、中英語、近代英語の歴史の変遷を学びながら、現代英語に至るまでの経緯を辿る。

(学習目標)

1. 英語の歴史の変遷を理解することが出来る。
2. 古英語、中英語、近代英語の語彙・特徴・文法を理解することが出来る。
3. 「地球語としての英語」の成立過程を理解することが出来る。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス、古英語以前の歴史、インド・ヨーロッパ祖語
- 第2回 グリムの法則、ヴェルネルの法則
- 第3回 古英語の時代：アングロ・サクソン人
- 第4回 古英語の文字、発音、語彙、特徴、方言
- 第5回 古英語の文法：名詞、動詞
- 第6回 古英語の文法：形容詞、語順の重要性
- 第7回 古英語の文法：主格、属格、与格、対格の用法
- 第8回 古英語の文法：代名詞、指示詞、動詞の活用、過去現在動詞
- 第9回 中英語の時代：ノルマン征服
- 第10回 中英語の文字、発音、語彙、特徴、方言
- 第11回 中英語の文法：名詞、形容詞、動詞、冠詞、代名詞、前置詞、語順
- 第12回 近代英語の時代：活版印刷、ルネサンス
- 第13回 近代英語の語彙、特徴
- 第14回 近代英語の文法、英語の標準化、辞書の編纂、綴り字と発音の乖離
- 第15回 まとめと到達度チェック

●準備学習の内容

特に指示しない限り、予習の必要はないが、前回までの授業内容を十分復習しておくこと。

●評価方法・基準

定期試験（80％）と授業への参加状況（20％）で評価する。試験の結果は、GOALSで確認すること。

●履修上の留意点

特別な理由がない限り全回出席し、真剣に取り組むこと。  
「英語という言語」の歴史を学ぶ。英語で書かれた資料を読むこともある。現代英語とは異なる古英語や中英語に興味・関心を持った学生の受講が望ましい。

●教科書

GOALS上で講義用資料を配布する。各自プリントアウトして授業に出席すること。

●参考書

特になし。

科目名	英語学特論Ⅱ（1部 専門言語学Ⅰ 2部 専門言語学）		
担当者	田中 洋也		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部3年 英・日語 2部3年 英・日語)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

言語習得の理論と研究方法を学び、グループでのリサーチプロジェクトを行うことで、外国語教育や第二言語習得研究を行う基本的知識、技法を身につけることを目的とする。

(学習目標)

1. 言語習得研究の特徴を理解し、説明ができる。
2. 第二言語習得研究における研究技法を理解し、運用することができる。
3. グループで協調して研究設計、実施ができる。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション・第二言語習得
- 第2回 母語獲得
- 第3回 言語音の知覚と語の獲得
- 第4回 文の獲得
- 第5回 インプットの役割
- 第6回 言語獲得理論
- 第7回 中間言語
- 第8回 第二言語習得のメカニズム
- 第9回 学習者要因
- 第10回 教室における第二言語習得研究
- 第11回 リサーチプロジェクト1 「研究課題」
- 第12回 リサーチプロジェクト2 「文献研究」
- 第13回 リサーチプロジェクト3 「研究設計」
- 第14回 リサーチプロジェクト4 「調査実施・考察」
- 第15回 リサーチプロジェクト5 プレゼンテーション

●準備学習の内容

第10週までは、教科書の各章を事前に読んで各自の考察に基づく授業課題を提出する。第11週以降は、関心と同じにするグループによるリサーチプロジェクトのための作業を協調して行う。

●評価方法・基準

授業課題50％、授業活動20％、リサーチプロジェクト30％

●履修上の留意点

第1回授業には必ず出席する。

●教科書

鈴木孝明・白畑知彦「ことばの習得 ― 母語獲得と第二言語習得」くろしお出版

●参考書

竹内理・水本篤「外国語教育研究ハンドブック―研究手法のより良い理解のために」松柏社

科目名	キリスト教文化論（宗教文化論）		
担当者	佐藤 貴史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	2部2年 日・英・日語		

#### ●授業のねらい

(授業のテーマ)

英米ならびにヨーロッパ文化を考えると、キリスト教の存在を無視することはできない。さまざまな文化と融合・対立しながら、キリスト教は独自の文化を形成してきたが、その重要な原動力の一つに『聖書』の思想があった。本講義では、ユダヤ教とキリスト教の形成過程、『旧約聖書』と『新約聖書』の内容を学びながら、英米ならびにヨーロッパ文化の宗教的基礎について考える。(学習目標)

1. 英米文化に限らず人間社会の基礎となっている〈宗教〉、とくにユダヤ教とキリスト教が、どのような過程で生まれ、今日まで伝わってきたかを学ぶ。
2. 現代世界における対立の火種のひとつにも数えられる〈宗教〉の基本的な知識を身につける。
3. キリスト教文化を材料としながら、物事の因果関係や複雑な現象について明晰に説明できる力をつける。

#### ●授業計画

- 第1回 宗教を通して文化を考える
- 第2回 創造する神（『旧約聖書』の思想1）
- 第3回 人間の罪（『旧約聖書』の思想2）
- 第4回 神の試練（『旧約聖書』の思想3）
- 第5回 モーセの召命（『旧約聖書』の思想4）
- 第6回 神によるユダヤ人の解放（『旧約聖書』の思想5）
- 第7回 神から与えられた法（『旧約聖書』の思想6）
- 第8回 ユダヤ教の批判者イエス（『新約聖書』の思想1）
- 第9回 イエスの受難（『新約聖書』の思想2）
- 第10回 ユダヤ教とイエスの描き方——ドイツとフランスの例
- 第11回 隣人とは誰か（『新約聖書』の思想3）
- 第12回 終末論と「この世界」（『新約聖書』の思想4）
- 第13回 終わらない世界（『新約聖書』の思想5）
- 第14回 神が人になる——絵画を題材として（『新約聖書』の思想6）
- 第15回 古代から中世へ

#### ●準備学習の内容

以下の内容を踏まえて、30分以上、予習復習をすることが望ましい。

1. 自分の生活の中に根づいている〈宗教的なもの〉を少しだけ意識して、そこから関心を広げること。
2. 参考書や新聞の中でふれられている宗教的なテーマにもできるだけ注意を向けること。

#### ●評価方法・基準

複数回の小テスト（40%）、期末試験（60%）で評価する。

#### ●履修上の留意点

世界史の知識も必要になるので、不安な人は高校レベルのものでよいので復習しておいてほしい。

#### ●教科書

特になし。プリントを配布する。

#### ●参考書

島蘭進 他＝編『宗教学キーワード』（有斐閣、2006年）。  
市川裕＝著『ユダヤ教の歴史』（山川出版社、2009年）。  
松本宣郎＝編『キリスト教の歴史1』（山川出版社、2009年）。  
高柳俊一 他＝編『キリスト教の歴史2』（山川出版社、2009年）。  
佐藤次高＝編『イスラームの歴史1』（山川出版社、2010年）。  
小杉泰＝編『イスラームの歴史2』（山川出版社、2010年）。

科目名	キリスト教文化論（宗教文化論Ⅰ）		
担当者	佐藤 貴史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語		

#### ●授業のねらい

(授業のテーマ)

英米ならびにヨーロッパ文化を考えると、キリスト教の存在を無視することはできない。さまざまな文化と融合・対立しながら、キリスト教は独自の文化を形成してきたが、その重要な原動力の一つに『聖書』の思想があった。本講義では、ユダヤ教とキリスト教の形成過程、『旧約聖書』と『新約聖書』の内容を学びながら、英米ならびにヨーロッパ文化の宗教的基礎について考える。(学習目標)

1. 英米文化に限らず人間社会の基礎となっている〈宗教〉、とくにユダヤ教とキリスト教が、どのような過程で生まれ、今日まで伝わってきたかを学ぶ。
2. 現代世界における対立の火種のひとつにも数えられる〈宗教〉の基本的な知識を身につける。
3. キリスト教文化を材料としながら、物事の因果関係や複雑な現象について明晰に説明できる力をつける。

#### ●授業計画

- 第1回 宗教を通して文化を考える
- 第2回 創造する神（『旧約聖書』の思想1）
- 第3回 人間の罪（『旧約聖書』の思想2）
- 第4回 神の試練（『旧約聖書』の思想3）
- 第5回 モーセの召命（『旧約聖書』の思想4）
- 第6回 神によるユダヤ人の解放（『旧約聖書』の思想5）
- 第7回 神から与えられた法（『旧約聖書』の思想6）
- 第8回 ユダヤ教の批判者イエス（『新約聖書』の思想1）
- 第9回 イエスの受難（『新約聖書』の思想2）
- 第10回 ユダヤ教とイエスの描き方——ドイツとフランスの例
- 第11回 隣人とは誰か（『新約聖書』の思想3）
- 第12回 終末論と「この世界」（『新約聖書』の思想4）
- 第13回 終わらない世界（『新約聖書』の思想5）
- 第14回 神が人になる——絵画を題材として（『新約聖書』の思想6）
- 第15回 古代から中世へ

#### ●準備学習の内容

以下の内容を踏まえて、30分以上、予習復習をすることが望ましい。

1. 自分の生活の中に根づいている〈宗教的なもの〉を少しだけ意識して、そこから関心を広げること。
2. 参考書や新聞の中でふれられている宗教的なテーマにもできるだけ注意を向けること。

#### ●評価方法・基準

複数回の小テスト（40%）、期末試験（60%）で評価する。

#### ●履修上の留意点

世界史の知識も必要になるので、不安な人は高校レベルのものでよいので復習しておいてほしい。

#### ●教科書

特になし。プリントを配布する。

#### ●参考書

島蘭進 他＝編『宗教学キーワード』（有斐閣、2006年）。  
市川裕＝著『ユダヤ教の歴史』（山川出版社、2009年）。  
松本宣郎＝編『キリスト教の歴史1』（山川出版社、2009年）。  
高柳俊一 他＝編『キリスト教の歴史2』（山川出版社、2009年）。  
佐藤次高＝編『イスラームの歴史1』（山川出版社、2010年）。  
小杉泰＝編『イスラームの歴史2』（山川出版社、2010年）。

科目名	2013以前入学生 言語学概論 I		
担当者	上野 誠治		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

言語学入門 — ことばについて意識的に考える  
(学習目標)

1. 人間のことばが有するさまざまなしくみを理解することが出来る。
2. 言語研究の初歩を身につける。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス：言語学とはどのような学問か  
 第2回 世界のことば①—言語の数、言語の分類と特徴  
 第3回 世界のことば②—世界の言語から見た日本語と英語  
 第4回 ことばと音声①—舌とのどで音が作られる  
 第5回 ことばと音声②—日本語風の英語と英語話者の英語はリズムが違う  
 第6回 ことばと語①—派生と複合  
 第7回 ことばと語②—異分析  
 第8回 ことばと文法①—統語構造、文の形成  
 第9回 ことばと文法②—日本語の節構造、埋め込み  
 第10回 ことばと意味①—語の意味  
 第11回 ことばと意味②—文の意味  
 第12回 ことばの変化①—音韻変化  
 第13回 ことばの変化②—形態変化  
 第14回 ことばの変化③—統語変化  
 第15回 まとめ

●準備学習の内容

毎回、教科書を予習して講義に出席するとともに、ノート整理などの復習も怠らないこと。

●評価方法・基準

定期試験(80%)と授業への参加状況(20%)で評価する。  
試験の結果は、授業および GOALS で確認すること。

●履修上の留意点

言語に興味、関心、意欲のある学生の受講を望む。常に、考えながら受講することが大切である。また、扱う言語資料は英語が中心となるので、ある程度の英語力も必要である。

●教科書

瀬田幸人・保阪靖人ほか『[入門] ことばの世界』大修館書店

●参考書

特になし。

科目名	2013以前入学生 言語学概論 II		
担当者	上野 誠治		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

言語学入門 — ことばについて意識的に考える  
(学習目標)

1. 人間のことばが有するさまざまなしくみを理解することが出来る。
2. 言語研究の初歩を身につける。

●授業計画

- 第1回 ことばと社会①—共通語・公用語  
 第2回 ことばと社会②—ことばの性差  
 第3回 ことばと文化①—ことばと思考  
 第4回 ことばと文化②—ことばと文化の関わり合い  
 第5回 ことばの誕生①—ことばの進化論  
 第6回 ことばの誕生②—ことばの特性  
 第7回 ことばの獲得①—文法の獲得  
 第8回 ことばの獲得②—規則性の発見  
 第9回 ことばと脳①—失語症  
 第10回 ことばと脳②—ことばの臨界期  
 第11回 ことばの情報構造①—情報構造の流れ  
 第12回 ことばの情報構造②—焦点、視点と共感  
 第13回 ことばの解釈①—語用論  
 第14回 ことばの解釈②—言葉の解釈の様々な例  
 第15回 まとめ

●準備学習の内容

毎回、教科書を予習して講義に出席するとともに、ノート整理などの復習も怠らないこと。

●評価方法・基準

定期試験(80%)と授業への参加状況(20%)で評価する。  
試験の結果は、授業および GOALS で確認すること。

●履修上の留意点

言語に興味、関心、意欲のある学生の受講を望む。常に、考えながら受講することが大切である。また、扱う言語資料は英語が中心となるので、ある程度の英語力も必要である。

●教科書

瀬田幸人・保阪靖人ほか『[入門] ことばの世界』大修館書店

●参考書

特になし。

科目名	2013以前入学生 専門言語学Ⅱ		
担当者	上野 誠治		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 英・日語		

意欲のある学生の受講を望む。初回の講義から英文資料を読み進んでいくので、特別な理由がない限り必ず授業に出席すること。

●教科書

GOALS 上でプリントを配布する。

●参考書

William O'Grady and John Archibald, Contemporary Linguistic Analysis: An Introduction. Sixth Edition. Pearson Longman. 2009.

●授業のねらい

(授業のテーマ)

形態論(語形成、語構造)の基本的な概念を理解する

(学習目標)

1. 英語で書かれたテキストの読解を通して、形態論に関する概念を復習し、言語分析の醍醐味を実感できる。
2. 英語で専門的な資料を読解できる。

●授業計画

- 第1回 Free and bound morphemes (自由形態素と拘束形態素)
- 第2回 Allomorphs (異形態)  
Roots and affixes (語根と接辞)
- 第3回 Types of affixes (接辞の種類)
- 第4回 Problematic cases  
Derivation (派生)
- 第5回 Some English derivational affixes (派生接辞)  
Complex derivations
- 第6回 Constraints on derivation (派生に課せられる制約)  
Two types of derivational affixes
- 第7回 Properties of compounds (複合語の特性)
- 第8回 Endocentric and exocentric compounds (内心複合語と外心複合語)  
Compounds in other languages
- 第9回 Inflection in English (屈折)  
Inflection versus derivation
- 第10回 Other inflectional phenomena:  
Internal change (内的変化)  
Suppletion (補充法)
- 第11回 Reduplication (重複)  
Tone (声調)  
Cliticization (接語化)
- 第12回 Conversion (転換)  
Clipping (刈り込み)  
Blends (混成)
- 第13回 Backformation (逆成)  
Acronyms and Initialisms (頭字語と字母読み頭字語)
- 第14回 Onomatopoeia (擬声語)  
Other sources of new words
- 第15回 Morphophonemics (形態音素論)  
まとめ

●準備学習の内容

演習形式で、英語で書かれた資料を読み進めていくので、入念な予習が必要である。初回を除き、事前に GOALS から資料をプリントアウトして授業に出席すること。

●評価方法・基準

レポート(翻訳) 80%

発表(予習) 20%

レポートは個別に返却する。

出席は重視するが、出席日数を加点することはしない。欠席した場合には、その回数に応じて減点する。無断で長期欠席した場合、その後の受講を認めない(成績は欠または不可とする)こともあるので留意すること。

●履修上の留意点

特別な理由がない限り全回出席し、真剣に取り組むこと。演習形式で、英語で書かれた資料を読んでいく。言語に興味、関心、

科目名	対照言語学 (1部 対照言語学Ⅰ 2部 対照言語学)		
担当者	呉 泰均		
単位数	2	開講期	第1学期 第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

ことばを表現する立場に立った視点から日本語のさまざまな側面を全般的に取り上げ、日本語をめぐる諸問題を他言語と比較対照することで、言語の普遍性をさぐると同時に、言語の特性を学問的に取り扱うための基礎的な力を身につけていく。  
(学習目標)

音声、文字、単語、表記といった言語の仕組みとしての側面、ジェンダー、年齢、方言といった社会言語学的な側面、社会構造を反映した敬語や配慮表現、文末表現といった対人的側面にかかわる次元まで、言語の全般にわたって日本語を科学的に分析する力や対照言語学的知見を身につけることができる。

●授業計画

- 第1回 対照言語学とは何か  
比較言語学との相違点
- 第2回 言語と言語学  
ことばの世界をさぐる
- 第3回 外から見る日本語  
世界の中の言語
- 第4回 音声学と音韻論1  
日本語と韓国語の音声学的特徴
- 第5回 音声学と音韻論2  
日本語の音韻、アクセントと音調
- 第6回 ことばの社会言語学的側面
- 第7回 言語学的基礎知識1  
対照言語学的観点からみる形態論
- 第8回 言語学的基礎知識2  
対照言語学的観点からみる統語論
- 第9回 語用論の世界1  
言語の対人関係性・対人的機能、言語行為
- 第10回 語用論の世界2  
コミュニケーションの仕組み
- 第11回 日本語と他アジア言語の運用特性比較対照
- 第12回 敬語と待遇表現  
日本語と韓国語の比較対照
- 第13回 Brown&Levinson のポライトネス理論  
言語行動における丁寧さ・配慮の対照言語学的解釈可能性
- 第14回 日本語コミュニケーションへのこだわり
- 第15回 異文化コミュニケーション  
日本語・英語・中国語・韓国語における言語行動の比較対照

●準備学習の内容

毎回授業中に説明する専門用語(言語学・日本語学)の意味などを理解しておくこと。

●評価方法・基準

成績評価は、主として学期末レポート(80%)によるが、授業態度などによる平常点(20%)も加えて総合的に評価する。

●履修上の留意点

授業中の私語など、他人に迷惑となる行為は控えていただきたい。  
毎回配布するハンドアウトを必ず持参すること。

●教科書

特定の教科書は用いない。毎回ハンドアウトを配布する。

●参考書

- 佐久間淳一・加藤重広・町田健 『言語学入門』 研究社
- 金田一春彦 『日本語(上)』 岩波新書
- 金田一春彦 『日本語(下)』 岩波新書

科目名	2013以前入学生 対照言語学Ⅱ		
担当者	中川かず子		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

日英の対照言語研究  
(学習目標)

日本語と英語の形態上、運用上の特徴を比較しながら、日本語の特徴を探る。授業では具体的な文章や談話、それに英語母語話者の日本語学習上の問題も取り上げていく。

●授業計画

- 第1回 対照言語学概論
- 第2回 日英の音声・音韻の特徴(1) — 母音
- 第3回 日英の音声・音韻の特徴(2) — 子音
- 第4回 日英の音声・音韻の特徴(3) — アクセント、イントネーション、リズム
- 第5回 日英の文法上の特徴(1) — 文構造、語順、品詞論
- 第6回 日英の文法上の特徴(2) — テンスとアスペクト
- 第7回 日英の文法上の特徴(3) — ムード・モダリティ
- 第8回 日英の表現上の特徴(1) — 話し手の視点、スルとナル
- 第9回 日英の表現上の特徴(2) — 高文脈と低文脈、動作の主体者中心 vs 動作の受け手中心
- 第10回 日英の表現上の特徴(3) — 日英の「発想と表現」のまとめ
- 第11回 日英の語彙の特徴(1) — 副詞、オノマトペを中心に
- 第12回 日英の語彙の特徴(2) — 動詞、名詞を中心に
- 第13回 日英の談話研究(1) — ダイクシス、指示関係、視点論
- 第14回 日英の談話研究(2) — 敬語の語用論、ポライトネス
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

毎回の学習内容の復習を行ない、疑問点を整理し、次回の授業までに検討する。不明な点は質問するようにする。

●評価方法・基準

平常点(授業参加態度, 30%), 試験(70%)により評価する。

小テストを課す場合もある。

●履修上の留意点

日英語の対照研究に関心があるか、日本語(国語)教師を志望する学生の履修が望ましい。旧カリの「対照言語学Ⅰ」と同様の内容。

●教科書

特に指定しない。プリントを使用する。

●参考書

授業中に適宜紹介する。



科目名	日本語学概論 I		
担当者	徳永 良次		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語研究入門

日本語の音声・音韻・文字表記などについて学ぶ。特に、普段「無意識に」使用している日本語の構造や特徴について、なるべく身近な話題を盛り込んで進めていく。

(学習目標)

日本語の音韻・文字・表記等について理論的かつ系統的に学習することで、普段何気なく使っている日本語への理解を深める。

●授業計画

第1回 言語の機能

第2回 言語機能の恣意性

第3回 音声と音韻

第4回 音素・単音

第5回 母音

第6回 子音 ハ行子音

第7回 子音 清濁・四つ仮名

第8回 アクセント

第9回 日本語表記の特色

第10回 かな

第11回 漢字

第12回 ローマ字

第13回 表記をめぐる諸問題

第14回 仮名づかい

第15回 まとめ

●準備学習の内容

日本語に関心を持ち、いろいろなことに目を向ける「知的好奇心」を持っていることが必要。「概論」という科目名ではあるが、かなり専門的で難解な内容である。従って事前の予習と事後の適切な復習は欠かせない。

●評価方法・基準

試験(80点)、平常点(20点)。平常点とは、ただ出席しているだけではなく、適宜課題を出して、調査・研究して発表してもらうことも考えており、それへの質疑状況などを主要な評価の対象とする。

●履修上の留意点

「概論」であるが日本語系科目としては最も難しいものである。安易な履修をせず、将来日本語学系のゼミを希望する者の履修が望ましい。

●教科書

藤田保幸『緑の日本語学教本』和泉書院

●参考書

授業時に必要に応じて言及する。

科目名	日本語学概論 I		
担当者	菅 泰雄		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	2部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語概説

日本語の音声・音韻・文字・表記について学ぶ。

(学習目標)

日本語の音韻・文字・表記等について理論的かつ系統的に学習することで普段何気なく使っている日本語への理解を深める。

●授業計画

第1回 日本語とは

第2回 言語の機能

第3回 言語研究の諸分野

第4回 音声と音韻

第5回 子音の分類

第6回 子音詳説

第7回 母音の分類

第8回 音節とその構造、拍

第9回 日本語の韻律(アクセント)

第10回 日本語の韻律(イントネーション・その他)

第11回 日本語の文字表記

第12回 漢字

第13回 仮名

第14回 ローマ字、国字問題

第15回 まとめ

●準備学習の内容

次回の授業内容について、教科書を読み、要点をまとめておく。また、授業で取り上げた項目を、現実の言語生活の中で確かめる観点で、日ごろから日本語に関心を持ち、「知的好奇心」を持って、日本語に目と耳を向けることが必要。

●評価方法・基準

試験(80%)と提出物(20%)による。提出物に対するコメントは、次回の授業の冒頭で行う。場合によっては、GOALS上で行うこともある。

●履修上の留意点

「概論」ということで、幅広い領域にわたって、将来日本語学系の授業を受ける上で必要となる多くの事項を学ぶことになる。その覚悟が必要である。国語教師、日本語教師にとっては、職業上必要な専門知識の一部である。なお、教科書は、主に予習・復習のための教材としての位置付けとする。教科書をなぞる形での授業は進めない。

●教科書

沖森卓也他編『日本語ライブラリー 日本語概説』朝倉書店

●参考書

必要に応じて講義中に言及する。

科目名	日本語学概論Ⅱ		
担当者	徳永 良次		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語研究入門(続)

日本語学概論Ⅰに引き続き、日本語の語彙・文法・方言などについて学ぶ。特に、普段「無意識に」使用している日本語の構造や特徴について、なるべく身近な話題を盛り込んで進めていく。(学習目標)

日本語の語彙・文法・方言等について理論的かつ系統的に学習することで、普段何気なく使っている日本語への理解を深める。

●授業計画

- 第1回 語と語彙
- 第2回 語彙量
- 第3回 語種 和語
- 第4回 語種 漢語
- 第5回 語種 漢語の造語力
- 第6回 語種 外来語
- 第7回 文法とは 主要文法学説
- 第8回 学校文法をめぐる諸問題
- 第9回 現代の文法研究の考え方
- 第10回 言語生活
- 第11回 方言 区画論
- 第12回 方言圏論
- 第13回 新方言
- 第14回 日本語の戸籍
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

日本語学概論Ⅰを履修していること。日本語に関心を持ち、いろいろなことに目を向ける「知的好奇心」を持っていることが必要。「概論」という科目名ではあるが、かなり専門的な内容である。

●評価方法・基準

試験(80点)、平常点(20点)。平常点とは、ただ出席しているだけでなく、適宜課題を出して、調査・研究して発表してもらうことも考えており、それへの質疑状況などを主要な評価の対象とする。

●履修上の留意点

「日本語学概論Ⅰ」を履修していることが望ましい。

●教科書

藤田保幸『緑の日本語学教本』和泉書院

●参考書

必要に応じて講義時に紹介する

科目名	日本語学概論Ⅱ		
担当者	菅 泰雄		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	2部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語概説

日本語の語彙・意味、文法、待遇表現、日本語の諸相について学ぶ。

(学習目標)

日本語の語彙・意味、文法、待遇表現、日本語の諸相について、理論的かつ系統的に学習することで、日本語への理解を深める。

●授業計画

- 第1回 語と語彙
- 第2回 意味とは
- 第3回 意味の変化
- 第4回 比喩表現
- 第5回 語種 和語
- 第6回 語種 漢語
- 第7回 語種 外来語、混種語
- 第8回 文法と文法理論
- 第9回 文法(形態論)の問題
- 第10回 文法(構文論)の問題
- 第11回 待遇表現
- 第12回 位相語
- 第13回 地域による変種
- 第14回 北海道の方言
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

今回の授業内容について、教科書を読み、要点をまとめておく。また、授業で取り上げた項目を、現実の言語生活の中で確かめる観点で、日ごろから日本語に関心を持ち、「知的好奇心」を持って、日本語に目と耳を向けること。

●評価方法・基準

試験(80%)、提出物(20%)により評価する。今回の授業の冒頭に、提出物に対するコメントを行う。場合によっては、GOALS上で行うこともある。

●履修上の留意点

教科書をなぞる形の授業は行わない。教科書は、主に予習・復習のための教材として位置付ける。

●教科書

沖森卓也他編『日本語ライブラリー 日本語概説』朝倉書店

●参考書

必要に応じて講義時に紹介する。

科目名	日本語学特論Ⅰ（日本語学Ⅰ）		
担当者	菅 泰雄		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語 (1部2年 日・日語 2部2年 日・日語)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語文法基礎

日本語文法（形態論・構文論）に関わる基礎的な概念，方法論，及び最近の研究動向について学ぶ。

(学習目標)

日本語文法についての基本事項を習得するとともに，自ら運用する言語について客観的に観察し評価する能力を身につける。国語教師，日本語教師にとって，身につけておくべき事項について理解を深める。

●授業計画

- 第1回 文法と文法理論
- 第2回 形態論と構文論
- 第3回 言語の単位（語と句の連続性）
- 第4回 品詞分類に見られる連続性
- 第5回 名詞の特性
- 第6回 動詞の特性
- 第7回 形容詞の特性
- 第8回 副詞の特性
- 第9回 助詞の用法
- 第10回 述語に現れる文法カテゴリー
- 第11回 ボイス
- 第12回 アスペクト
- 第13回 テンス
- 第14回 モダリティ
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

十分な復習をし，疑問点等は参考書などで解決することが必要である。日頃から，身の周りの日本語（表現）に目と耳を向けておいてほしい。

●評価方法・基準

試験による。

●履修上の留意点

「日本語学概論Ⅰ・Ⅱ」を履修済みという前提で授業を進める。未履修の場合は，

独習で，その知識を身につけておくこと。国語教師，日本語教師にとっては，職業上，必要な専門的知識の一部である。質問に対するコメントは，次回の授業時冒頭に行うので，遅刻は厳禁である。

●教科書

特になし。プリント配布。

●参考書

森山卓郎『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房，2000年  
山田敏弘『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版，2004年

松岡 弘監修（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』

スリーエーネットワーク

白川博之（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』同上

その他，必要に応じて授業時に言及する。

科目名	日本語学特論Ⅱ（日本語学Ⅱ）		
担当者	徳永 良次		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語 (1部3年 日・日語 2部3年 日・日語)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

テーマ：古代日本語発掘

現代語のおかれていた現状を正しく理解するためには，古代日本語がどのように変化し発展してきたのか，そして現在も変化し続けているのか，ということについての知識を深めることが重要である。

講義では，日本語の変化について時代順に紹介していく予定である。その際，必要に応じて資料を読んでいく。

(学習目標)

日本語の各分野について通時的に学びながら，現代日本語の成立について理解を深める。

言語変化について体系的に理解する。

重要な資料についてある程度読めるようにする。

●授業計画

- 第1回 日本語の時代区分
- 第2回 奈良時代 文字
- 第3回 奈良時代 音韻 その他
- 第4回 平安時代 資料
- 第5回 平安時代 文字・かなの発展
- 第6回 平安時代 かな文字資料を読む
- 第7回 平安時代 音韻 音節数の減少について
- 第8回 平安時代 音韻 ハ行転呼音 音便
- 第9回 平安時代 文法
- 第10回 鎌倉時代 仮名づかい
- 第11回 鎌倉時代 文法 音韻
- 第12回 室町時代 資料 音韻
- 第13回 中世の資料を読む
- 第14回 江戸時代 文字・音韻
- 第15回 江戸時代 文法・語彙

●準備学習の内容

基本的な古典文学や歴史上の知識は知っておくことが望ましい。

●評価方法・基準

授業への参加（ミニテストなどを含む）20% 試験80%  
ミニテストの結果については講義時に言及する。

●履修上の留意点

ノートはきちんと取ること。教科書を使わないので不明な点はすぐに解決しておくこと。

●教科書

使用しない。

●参考書

適宜プリントを配布する。

科目名	日本語教育演習（日本語教育演習Ⅰ）		
担当者	國岡 洋亮		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年	日・英・日語	
	2部3年	日・英・日語	

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語教師に必要とされる知識を深め、日本語教育の方法として応用できるようにする。

(学習目標)

日本語教育能力検定試験に対応した知識を習得し、日本語教育の実践につながる応用力を身につける。日本語教育及び関連する領域についての動向を知る。

●授業計画

- 第1回 授業の目的・進め方、履修上の注意
- 第2回 日本語教育とは
- 第3回 日本語の音声・音韻体系(1)基礎編
- 第4回 日本語の音声・音韻体系(2)応用編・聴解
- 第5回 日本語の文法体系(1)基礎編
- 第6回 日本語の文法体系(2)応用編
- 第7回 日本語の文法体系(3)実践編
- 第8回 言語運用能力
- 第9回 言語使用と社会
- 第10回 言語習得・発達(1)習得過程
- 第11回 言語習得・発達(2)学習者要因
- 第12回 異文化理解と心理
- 第13回 言語教育法(1)基礎編
- 第14回 言語教育法(2)応用編
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

日ごろから日本語教育や言語に対する関心を持ち、授業の中で考察し発表できるようにする。

●評価方法・基準

平常点（授業活動参加など）（50%）、試験（50%）で評価する。

●履修上の留意点

講義及び学生による発表によって授業を行う。広い分野にわたるため、すでに日本語学・日本語教育学に関する基礎的な知識を有しているものとして授業を進める。

●教科書

公益財団法人・日本国際教育支援協会『平成28年度 日本語教育能力検定試験 試験問題』（凡人社、2017年）

●参考書

授業時に必要に応じて言及する。

科目名	日本語教育学特論（異文化間教育学）		
担当者	伊藤 早苗		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語 (1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語)		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

グローバル化に伴い、多文化化の進む現代社会において、留学生の他に、年少者、就業者、その同伴家族など日本語学習者の文化的背景は多様化している。学習者が異文化環境で学ぶ過程での課題を、日本語学習支援者側が理解することが求められる。また、日本語学習支援者自身にとっても、異文化に適切に対応し、異文化から学ぶ「異文化リテラシー」を身につけることが必須である。これは、日本語教師養成においても、また、社会人、市民としても、今後の多文化共生社会を考えるために必要である。授業では、日本語教育において、異文化間に生じる様々な教育問題を取り上げ、理解を深める。

(学習目標)

1. 異文化間教育の観点から見た日本語教育における、地域、国内、世界の現状と課題を理解し、説明することができる。
2. 多様な日本語学習者の背景を理解し、異文化にたいする寛容性を身につけ、異文化から学ぶ視点を得る。

●授業計画

- 第1回 日本語教育学特論(異文化間教育学)オリエンテーションー日本語教育における異文化間教育学から見た課題
- 第2回 多文化化する日本社会の現状と課題
- 第3回 異文化間教育の基礎概念1ー文化の定義
- 第4回 異文化間教育の基礎概念2ー異文化コミュニケーション能力と適応
- 第5回 異文化間教育の基礎概念3ーアイデンティティと文化
- 第6回 言語と社会1ー個人と異言語コミュニティ：日本語学習とバイリンガリズム
- 第7回 言語と社会2ー言語の異なるコミュニティ間：言語政策と日本語教育
- 第8回 日本語学習者の多様性ー中国・サハリン帰国者について
- 第9回 学校教育における日本語教育1ー小中学校での年少日本語学習者
- 第10回 学校教育における日本語教育2ー夜間中学校、高校での青少年・成人日本語学習者
- 第11回 地域における多文化共生ー成人日本語学習者と地域の日本語学習支援団体
- 第12回 マイノリティの母語保持と日本語学習ー日本の事例
- 第13回 海外のマイノリティの母語保持と第二言語学習ーアメリカの事例
- 第14回 地域における国際化ー外国人集住都市会議、国際化推進プラン、札幌市国際戦略プラン
- 第15回 まとめー学生的事例発表：異文化から学んだことについて

●準備学習の内容

毎回の課題に関する参考資料を読むこと。また、学内外で積極的に異文化交流体験を伴う活動（ボランティア、交流行事参加、留学生との協働作業など）を実践し、発表することが推奨される。

●評価方法・基準

期末レポート(50%)、数回の小レポート(30%)と平常点(20%)で評価する。

期末レポートのフィードバックをGOALSで確認すること。

小レポートは採点・評価の後、授業時間内に返却してフィードバックする。

●履修上の留意点

受講者各自の経験を共有することによって、身近な視点とグローバルな視点を往復しながら、理解を深めたい。クラスの学習活動に貢献する積極的な発言を期待する。なお、授業内容は必要に応じて変更する場合がある。

●教科書

特になし。

●参考書

佐藤郡衛(2010)『異文化間教育ー文化間移動と子どもの教育』明石書店

その他の参考書は授業中に指示する

科目名	日本語教育特別演習（日本語教育演習Ⅱ）		
担当者	中川かず子		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

海外、または国内の日本語教育現場で体験的な学習とともに教育実践能力を身に付ける。

(学習目標)

1. 対象となる教育現場と学習者に合う教材と教授法を考える。
2. 具体的な授業案を作成し、実習授業で実践する。
3. 課題を認識し、問題解決の方法を考える。

●授業計画

授業の開講形態として、後期、集中講義とする。以下に授業計画を示す。

- 1) 実習のための準備として、教案・教材、教授法に関する指導（実習前に約10時間の集中授業により指導，8月下旬～9月初旬に実施）
- 2) 実習授業――
  - ①市内日本語教室【ボランティア日本語教室「たんぼぼ」（札幌エルプラザ内）で9月～12月週1回3時間，計30時間，うち，見学，TA（アシスタント）が20時間，授業実習が10時間，授業後の反省会には毎回参加】
  - ②海外日本語教育機関【韓国協定校「大田大学」にて9月初旬～中旬2週間，30時間，うち，見学，TA（アシスタント）が20時間，授業実習が10時間（予定），実習授業のほか，学習者との交流も行なう。】
- 3) フィードバック【実習後の反省会，11月に2時間】

【日程については多少の変更の可能性有】

●準備学習の内容

事前に配布された資料を読んだり，課題に取り組み，積極的に質問を出しておく。特に海外（韓国大田大学）の実習を行う場合は，韓国における日本語教育の歴史，その特徴についても理解を深めておく。

●評価方法・基準

授業参加態度（30%），実習成績（30%），教案・教材一覧（ポートフォリオ）（20%），レポート（20%）

●履修上の留意点

本授業は集中形態をとり，事前，事後の授業時間が限られることから，欠席は認められません。やむを得ない事情がある場合は事前に相談すること。

●教科書

特に使用しない。プリントを用意する。

●参考書

授業中，適宜紹介する。学習者の言語習得，外国語教授法，対照言語関連の文献，資料が中心

科目名	日本語教授法Ⅰ		
担当者	中川かず子		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語教授法（概論）

(学習目標)

日本語教育の内容と方法の全体像を学ぶ。

●授業計画

- 第1回 日本語教育概論――日本語の捉え方，学習者と教授法ほか
- 第2回 異文化間教育としての日本語教育――異文化適応，文化の捉え方
- 第3回 初級学習者への教育(1)―会話と文法（構造シラバス～文法と会話）
- 第4回 初級学習者への教育(2)―会話と文法（機能シラバスとコミュニケーション）
- 第5回 初級学習者への教育(3)―音声の指導
- 第6回 中上級学習者への教育(1)―読解と文法，語彙・表現
- 第7回 中上級学習者への指導(2)―談話の指導
- 第8回 中上級学習者への指導(3)―文字表記（仮名遣い，漢字の字音・字訓，ローマ字）
- 第9回 日本語教育と日本語学習――第二言語習得，学習者要因，学習ストラテジー
- 第10回 外国語教授法と日本語教育(1)――Natural Method～Direct Method（直接法）
- 第11回 外国語教授法と日本語教育(2)――Audio-Lingual 法～コミュニケーション法
- 第12回 国内外における日本語教育の歴史(1)――19世紀後半～戦前
- 第13回 国内外における日本語教育の歴史(2)―戦後～現在
- 第14回 まとめ
- 第15回 到達度チェック

●準備学習の内容

配布される資料や講義内容を復習し，疑問点や質問事項を整理した上で，次回の授業に臨む。

●評価方法・基準

授業参加態度（30%），試験結果（70%）を総合して評価する。

●履修上の留意点

概論ではあるが，やや実践的な内容に即して授業を進めるので，日本語教員養成課程履修者のほか，日本語教育に関心のある学生の履修を望む。

●教科書

なし。プリントを使用するほか，OHP，PPTなどで資料提示する。

●参考書

授業中に適宜紹介する。

科目名	日本語教授法Ⅱ		
担当者	中川かず子		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語教授法(概論～より実践的な側面を学ぶ)

(学習目標)

具体的な日本語教育の内容と方法を学習する。日本語教育の全体像を知る。

●授業計画

- 第1回 学習者の多様性と日本語教育  
コースデザイン, シラバスデザインについて
- 第2回 初級学習者への教授法(1)ーコミュニケーションのための音声教育  
(アクセント, イントネーションの習得)
- 第3回 初級学習者への教授法(2)ー会話・文法教育の実践(表現文型, 場面を中心とした直接法)
- 第4回 初級学習者への教授法(3)ー口頭コミュニケーション能力育成のための教育  
(インターアクション, タスク型, プロジェクト型教授法について)
- 第5回 初・中級学習者への教授法ー非漢字圏学習者への漢字指導法  
(創造的な漢字指導ー Basic Kanji, Intermediate Kanji を中心に)
- 第6回 中上級学習者への教授法(1)ー読解指導の実践, 読解ストラテジー
- 第7回 中上級学習者への教授法(2)ー読解の実践法ー口頭表現力の育成法
- 第8回 中上級学習者への教授法(3)ー中上級学習者のための文法内容とその指導
- 第9回 学習者の誤用と語用論的能力の習得(1)ー文法, 語彙・表現を中心に
- 第10回 学習者の誤用と語用論的能力の習得(2)ー音声, 聴解を中心に
- 第11回 多様な学習者に対する教材, 教授法について
- 第12回 日本語教育における評価法ーテストの種類, 評価の基準について
- 第13回 国内における日本語教育ー留学生政策, 外国人への施策
- 第14回 海外における日本語教育ー現状と課題
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

配布資料や講義内容を復習し, 疑問点や質問を整理した上で, 次回の授業に臨む。

第1回～第10回までの授業では毎回2～3の「課題」と取り組み, 授業中, または翌週に確認を行なう。

●評価方法・基準

平常点(30%), 試験(70%)を総合的に評価する。

●履修上の留意点

日本語教育に関心のある学生の履修を望む。

●教科書

なし。プリントを使用するほか, OHP, PPTなどで資料提示する。

●参考書

授業中に適宜紹介する。

科目名	日本語教授法Ⅲ		
担当者	須藤むつ子		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語を母語としない人への日本語教育の方法を, 理論をふまえて実践的に学ぶ。

(学習目標)

- 1) 日本語の仕組みを理論的に理解し, 自らの日本語や周りにある日本語を客観的に分析する。
- 2) 様々な背景を持つ日本語学習者の現状に合わせた初級の教授法を学ぶ。
- 3) 実習により初級レベルの日本語教育における実践力を養成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス, 履修上の留意点
- 第2回 初級日本語とは(1)授業で何を行うか
- 第3回 初級日本語とは(2)何を使って教えるか
- 第4回 実際の教え方(1)授業の流れ① アイスブレイキングと導入
- 第5回 実際の教え方(2)授業の流れ② 基本練習と応用練習
- 第6回 教案の作り方
- 第7回 教壇での動き方
- 第8回 初級模擬実習(1)形容詞
- 第9回 初級模擬実習(2)動詞の活用(て形など)
- 第10回 初級模擬実習(3)受身
- 第11回 初級模擬実習(4)まとめ
- 第12回 実習フィードバック(1)授業の組み立て方
- 第13回 実習フィードバック(2)教え方, 説明の仕方
- 第14回 評価
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

実習では念入りに事前準備を行う必要があるため, グループ内で連絡を合うなどチームワークが求められる。また, 普段から身の回りの日本語を意識する習慣をつけることが望ましい。

●評価方法・基準

平常点(授業態度, 課題等提出物など)(70%), 模擬授業への取り組み(30%)

●履修上の留意点

原則的に日本語教授法Ⅰ, Ⅱの履修者を対象とする。

●教科書

教師がプリントを配布する。

●参考書

授業内にて適宜紹介していく。

科目名	日本語教授法Ⅲ		
担当者	歌代 崇史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

日本語教育に関連した理論を踏まえ、実践における教授方法を学習する。1学期では主に初級レベルの授業で必要となる知識とスキルを学ぶ。初級レベルにおける文法指導を基盤にしつつ、読む、書く、話す、聞くの4技能の育成を総合的に行う授業の構成方法について考える。授業の組み立て方、シラバスの作成方法、指導案の書き方などについて実習を取り入れながら学ぶ。

(学習目標)

1. 日本語学習者と日本語教師の役割を理解し、学習者の能力に応じたシラバス作成、指導のあり方について考える。
2. 初級文法の指導方法、指示の仕方、教室活動の実施方法を学び、短い時間の授業が構成できるようになる。
3. 教材分析及び指導案が作成できるようになる。
4. 実習を行う。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション、日本語教師の役割(1)
- 第2回 日本語教師の役割(2)、コースデザイン(1)
- 第3回 コースデザイン(2)、初級文法知識の整理(やり方説明)、グループ決定
- 第4回 初級文法知識の整理(発表) 1
- 第5回 初級文法知識の整理(発表) 2
- 第6回 シラバスの概要、日本語教科書のもくじから考える、文型から課の目標を考える
- 第7回 副教材を考える。現実に近いコミュニケーションの指導方法。文法の教え方の概要。
- 第8回 指導案の書き方→指導案を書く
- 第9回 日本語教科書の構成を知る。実習担当箇所決定、担当箇所の教科書分析→指導案の作成
- 第10回 指導案の修正、オリジナルの活動を考える。
- 第11回 グループごとに練習。評価ポイントの確認。
- 第12回 実習1(グループごとに模擬授業を実施)
- 第13回 実習2(グループごとに模擬授業を実施)
- 第14回 実習3(グループごとに模擬授業を実施)
- 第15回 模擬授業の分析及びリフレクション、新しい指導案の作成

●準備学習の内容

毎週配布される資料を読み、授業に備える。

●評価方法・基準

平常点(授業への参加態度) 10%  
課題提出20%  
実習35%(実習に参加しなければ評価対象にしない)  
レポート35%(提出されなければ評価対象にしない)  
出席率は70%以上必要  
課題に関しては授業の中でフィードバックを行う

●履修上の留意点

日本語教授法Ⅰ及びⅡを履修していることが望ましい。課題提出、授業中の議論、グループ作業、実習への積極的な参加を求める。

●教科書

特に指定しない。教師作成のプリント、資料等。

●参考書

特になし

科目名	日本語教授法Ⅳ		
担当者	須藤むつ子		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英・日語		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

日本語を母語としない人への日本語教育の方法を、理論をふまえて実践的に学ぶ。

(学習目標)

- 1) 日本語教授法Ⅲで学んだことをふまえて、日本語の仕組みの理解を更に深め、自らの日本語や周りにおける日本語を客観的に分析する。
- 2) 様々な背景を持つ日本語学習者の現状に合わせた中上級の教授法を学ぶ。
- 3) 実習により中上級レベルの日本語教育における実践力を養成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス、履修上の留意点、中上級レベルとは
- 第2回 中上級の授業とは
- 第3回 中上級の授業計画
- 第4回 ニーズに合わせた日本語の授業
- 第5回 実習に向けて(1)学習目標と学習項目
- 第6回 実習に向けて(2)教案作成
- 第7回 実習に向けて(3)教材の選定
- 第8回 実習に向けて(4)練習問題作成
- 第9回 中上級模擬授業(1)文法
- 第10回 中上級模擬授業(2)会話
- 第11回 中上級模擬実習(3)総合
- 第12回 中上級模擬授業(4)まとめ
- 第13回 読解問題の作成
- 第14回 フィードバック
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

実習では十分な事前準備が必要になるため、グループ内で連絡を取り合うなどチームワークが求められる。また、普段から身の回りの日本語を意識する習慣をつけることが望ましい。

●評価方法・基準

平常点(授業態度、課題等提出物など)(70%)、模擬授業への取り組み(30%)

●履修上の留意点

原則的に日本語教授法Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの履修者を対象とする。

●教科書

教師がプリントを配布する。

●参考書

授業内にて適宜紹介していく。



科目名	日本語教授法Ⅳ		
担当者	歌代 崇史		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

2学期では主に中・上級レベルの授業で必要となる知識とスキルを学ぶ。日本語教育における中級・上級レベルを理解し、技能別に様々な教授方法を分析する。分析を踏まえて、教材作成、教材を使った実践を行う。読む、話すの2技能の指導に関して、実習形式で授業を進める。指導案の作成、実習準備、実習の実施、実習の振り返りなど積極的な参加を必要とする課題が多い。

(学習目標)

1. 日本語教育における中級・上級の理解。
2. 技能別に「読む」、「話す」の指導方法を理解する。
3. 教材分析を踏まえて、指導実践を行う。
4. オリジナル教材を作成し、実習を行う。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション、中・上級の理解  
 第2回 グループの決定、担当日の決定、日本語能力試験と日本留学試験  
 第3回 試験問題による中・上級の理解  
 第4回 OPIの理解と実践  
 第5回 OPIを利用した授業実践  
 第6回 「話す」教材の分析と理解  
 第7回 「話す」の教材分析発表  
 第8回 「話す」模擬授業  
 第9回 フリーソフトを使った新しい学習タスクの考案  
 第10回 フリーソフトを使った新しい学習タスクの発表  
 第11回 オリジナル教材による模擬授業の説明、発表順番決定、授業準備  
 第12回 オリジナル教材による模擬授業(1)  
 第13回 オリジナル教材による模擬授業(2)  
 第14回 オリジナル教材による模擬授業(3)  
 第15回 模擬授業の分析及びリフレクション、新しいオリジナル教材とその指導案の作成

●準備学習の内容

毎週配布される資料を読み、授業に備える。

●評価方法・基準

平常点(授業中への参加態度)10%  
 課題提出40%  
 実習25%(実習に参加しなければ評価対象にしない)  
 レポート25%(提出がなければ評価対象にしない)  
 出席率は70%以上必要  
 課題に関しては授業の中でフィードバックを行う

●履修上の留意点

日本語教授法Ⅲを履修していることが望ましい。実習、課題発表には積極的に参加することを求める。

●教科書

特になし

●参考書

特になし

科目名	2013以前入学生 日本語史		
担当者	徳永 良次		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・日語 2部2年 日・日語		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

テーマ：古代日本語発掘

日本語の歴史は、上代から近現代にわたり、文字・表記、音韻、文法、語彙、文体など幅広く、互いに関連しながら存在している。現代語のおかれている現状を正しく理解するためには、古代日本語がどのように変化し発展してきたのか、そして現在も変化し続けているのか、ということについての知識を深めることが重要である。

講義では、日本語の変化について時代順に紹介していく予定である。その際、必要に応じて研究分野別に詳細に言及することもある。

(学習目標)

日本語の各分野について通時的に学びながら、現代日本語の成立について理解を深める。

言語変化について体系的に理解する。

重要な資料についてある程度読めるようにする。

●授業計画

- 第1回 日本語史の時代区分  
 第2回 日本語系統論  
 第3回 奈良時代(文字・音韻)  
 第4回 奈良時代(語彙・文法その他)  
 第5回 平安時代(資料)  
 第6回 平安時代(文字・かなの発展)  
 第7回 平安時代(音韻1) 音節数の減少について  
 第8回 平安時代(音韻2) ハ行転呼音 音便など  
 第9回 平安時代(文法)  
 第10回 平安時代(語彙・文体)  
 第11回 鎌倉時代 定家仮名遣い 文法変化  
 第12回 室町時代 キリシタン資料 音韻現象の解説  
 第13回 江戸時代(文字・音韻)  
 第14回 江戸時代(文法・語彙)  
 第15回 まとめと到達度チェック

●準備学習の内容

基本的な古典文学や歴史上の知識は知っておくことが望ましい。

●評価方法・基準

筆記試験80% 参加度20%

●履修上の留意点

ノートはきちんと取ること。教科書を使わないので不明な点はすぐに解決しておくこと。

●教科書

特になし。プリントを配布する

●参考書

適宜指示する

科目名	日本語発声実習		
担当者	塚原 孝子		
単位数	2	開講期	第1学期 第2学期
開講年次	1部1年 日・英・日語 2部1年 日・英・日語 (1部1年 日・日語 2部1年 日・日語)		

#### ●授業のねらい

(授業のテーマ)

話しをする、あるいは読む時、その人の知性と感性が求められる。よりよいコミュニケーションのために表現力をアップして、美しく魅力的な日本語を身につける(豊かな声量、響きのよい声、柔らかくて落ち着いた声、品位を感じられる声作りで表現力をつける)

(学習目標)

自分の話し方をありのままに捕えて、客観的に見つめ直し言葉の世界を豊かにし、感性を磨く。相手の心に届く「声」をめざす。

#### ●授業計画

- 第1回 なぜ何のために、日本語を学ぶのか(オリエンテーション)
- 第2回 話し言葉の心得(よりよいコミュニケーションのために)
- 第3回 呼吸法と基本トレーニング(1)
- 第4回 呼吸法と基本トレーニング(2)～実践
- 第5回 発声法
- 第6回 発音法
- 第7回 正しく美しい音声表現(標準語と方言など)
- 第8回 日本語の音調(アクセント、イントネーション、プロミネンス、アーティキュレーションなど)
- 第9回 朗読法
- 第10回 表現の技術(基礎及び実践) - 1
- 第11回 表現の技術(実践) - 1
- 第12回 表現の技術(実践)スタジオ使用 - 1
- 第13回 表現の技術(実践)スタジオ使用 - 1
- 第14回 話し言葉の実践(待遇表現、敬語)
- 第15回 まとめと到達度チェック

#### ●準備学習の内容

授業中での指示に従って(配布物なども参考に)課題に取り組み、復習をして次の授業に備える。

#### ●評価方法・基準

試験(40%)授業への参加状況(40%)「基礎知識の習得」に関する、小テスト、レポート(20%)で評価する。レポートの結果については授業内でコメントする。

#### ●履修上の留意点

第1回目の講義を受けた者のみ履修対象者とする。(但し、履修希望者が多い場合は、テストなどで選考する場合がある)  
欠席届があった場合を除き、欠席が3回となった者の単位は認められない。課題、テーマへの意欲的な取り組み、積極的な授業への参加と受講態度を重視するものとする。授業の性格上、人数が30人を超える場合は履修制限をする可能性がある。

#### ●教科書

特に使用しない。必要に応じてプリントを配布する。

#### ●参考書

参考文献は授業中に紹介する。

科目名	日本史概論 I		
担当者	追塩 千尋		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日・日語 2年 英 2部1年 日・日語 2年 英 (1部1年 日・英 2部1年 日・英)		

#### ●授業のねらい

(授業のテーマ)

「日本古代・中世の論点的通史」 高校までの日本史を踏まえ、大学では単なる通史ではなく、何が問題になっているのか、それをどのように考えたらよいのか、という関心のもとに日本古代・中世の諸問題をいくつか取り上げて論ずる。

(学習目標)

1. 歴史は歴史研究者により作られるものであることを理解し得ること。
2. 高校までに学んだ日本史からの脱却が出来るかどうか。

#### ●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 邪馬台国から大和朝廷へ(1)～邪馬台国論争
- 第3回 邪馬台国から大和朝廷へ(2)～大和朝廷
- 第4回 聖徳太子論
- 第5回 律令国家論(1)～しくみ・制度
- 第6回 律令国家論(2)～平城京
- 第7回 王朝国家論～そのしくみ
- 第8回 王朝国家論～政治の展開
- 第9回 中世社会観の変遷
- 第10回 鎌倉幕府論
- 第11回 室町幕府論
- 第12回 戦国大名論
- 第13回 中世の天皇
- 第14回 中世の歴史思想
- 第15回 まとめと到達度チェック

#### ●準備学習の内容

高校で日本史を学んでいない受講者は最低限教科書レベルの理解をしておくこと

#### ●評価方法・基準

試験100点(講義ノート・配布資料の参照可の試験。講義の意図の理解の可否が鍵)。授業の節目に何回か感想・質問などを記入してもらい、フィードバックする場を設ける。

#### ●履修上の留意点

歴史事象の評価は固定的なものではなく、視点を変えると違った歴史像が描けるものである、ということをも早く認識すること。

#### ●教科書

使用しない。必要に応じてプリント配布。

#### ●参考書

井上光貞他編『日本歴史大系』1.2,山川出版社,1984年  
岩波講座『日本歴史』1～9巻,岩波書店,2013年～  
『日本の時代史』全30巻,吉川弘文館,2002年～2004年  
『新体系日本史』全20冊,山川出版社,2001年～  
『展望日本歴史』全24巻,東京堂出版,2000年～  
個別のものはその都度指示

科目名	日本史概論Ⅱ（日本史概論Ⅲ）		
担当者	郡司 淳		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日・日語 2年 英 2部1年 日・日語 2年 英 (1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語)		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

本授業は、日本がペリーの来航によって「西欧の衝撃」を受けた19世紀中頃から、1945年のアジア・太平洋戦争の敗戦にいたる時期を対象とし、日本近代史を概観しようとするものである。具体的には、江戸時代における全国市場の成立をふまえ、日本が明治維新、日清・日露戦争を経て「脱亜入欧」を果たしたのち、西欧列強とともに創り上げた第一次世界大戦後の国際社会の枠組みであるベルサイユ=ワシントン体制に挑戦し、独自の秩序形成に向かった満州事変からアジア・太平洋戦争かけての歴史をあとづける。

(学習目標)

- ・日本近代史についての基礎的知識を身につける。
- ・史資料をもとに歴史を再構成する方法を身につける。

●授業計画

- 第1回 ガイダンスー近代とは
- 第2回 江戸時代
- 第3回 西欧の衝撃
- 第4回 明治維新1ー統一国家の形成
- 第5回 明治維新2ー戸籍・学制・徴兵制
- 第6回 「御一新」と民衆
- 第7回 立憲国家への道
- 第8回 日清戦争
- 第9回 産業革命1ー資本主義の成立
- 第10回 産業革命2ー女工労働の実態
- 第11回 日露戦争
- 第12回 大正デモクラシー
- 第13回 戦争の時代
- 第14回 敗戦
- 第15回 まとめー到達度チェックと解題

●準備学習の内容

- ・テーマ毎に事前に資料プリントを配布するので、辞書・辞典を引きつつ、予め読んでおくこと。
- ・授業で提示された歴史像を相対化し、自らのものとすべく、関連文献を可能な限り読むこと。

●評価方法・基準

授業最終日に実施する論述形式の到達度チェックで評価する。設問に対し、授業で得た知見をふまえ、自分の言葉で解答し得たか否か、さらにそれが論として成り立っているか否かが評価の基準となる。

●履修上の留意点

資料読解に必要な国語辞典・漢和辞典・歴史事典・歴史年表等を持参すること。

●教科書

資料プリントを配布する。

●参考書

適宜紹介する。

科目名	日本史特論Ⅱ（日本史概論Ⅳ）		
担当者	郡司 淳		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部2年 日・英・日語<英は2009以降生のみ>) (2部2年 日・英・日語<英は2009以降生のみ>)		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

本授業では、西欧列強が支配する世界国家秩序が非西欧世界における「近代国家」成立を促し、その近代国家が「国民」を創出したとの基本的理解の下に、「文明」をキー概念として近代日本におけるネイションの形成を概観する。具体的には、近代天皇制と日清・日露戦争が国民統合に果たした役割を検証するとともに、時間・身体・言語の文明化および女性の国民化を取り上げ、近代日本におけるネイションの形成をあとづけたい。

(学習目標)

- ・史資料をもとに歴史を再構成する方法を身につける。
- ・日本近代史についての基礎的知識を身につける。

●授業計画

- 第1回 ガイダンスー「国民」とは
- 第2回 近代の王権1ー前近代の天皇
- 第3回 近代の王権2ー大日本帝国憲法上の天皇
- 第4回 近代の王権3ー大元帥・「貧者の王」として
- 第5回 ナショナリズム1ー日清戦争
- 第6回 ナショナリズム2ー日露戦争
- 第7回 近代の時間1ー一定時法の採用
- 第8回 近代の時間2ーハレ日とハタ日
- 第9回 身体の文明化1ー「運動会」の思想
- 第10回 身体の文明化2ー兵式体操がもたらしたもの
- 第11回 「国語」の成立1ー前近代の言語状況
- 第12回 「国語」の成立2ー上田万年の挑戦
- 第13回 女性の国民化1ー「家」制度の成立
- 第14回 女性の国民化2ー「良妻賢母」の思想
- 第15回 まとめー到達度チェックと解題

●準備学習の内容

- ・テーマ毎に事前に資料プリントを配布するので、辞書・辞典を引きつつ、予め読んでおくこと。
- ・授業で提示された歴史像を相対化し、自らのものとすべく、関連文献を可能な限り読むこと。

●評価方法・基準

授業最終日に実施する論述形式の到達度チェックで評価する。設問に対し、授業で得た知見をふまえ、自分の言葉で解答し得たか否か、さらにそれが論として成り立っているか否かが評価の基準となる。

●履修上の留意点

資料読解に必要な国語辞典・漢和辞典・歴史事典・歴史年表等を持参すること。

●教科書

資料プリントを配布する。

●参考書

適宜紹介する。

科目名	日本文化概論Ⅰ（日本文化史Ⅰ）		
担当者	鈴木 英之		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日・日語 2部1年 日・日語 (1部1年 日・日語 2部2年 日・日語)	2年 英	2年 英

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

日本は、四方を海に囲まれているが、決して閉鎖された空間などではない。中国や朝鮮、ロシア、また南方からも様々な人々が日本を訪れ、互いに影響を与えあいながら、多種多様な文化を形成してきた。本講義では、地理・神話・宗教・哲学・思想・祭り・言語・文学・芸能・建築・食文化・世界遺産などの側面から、多様に富んだ日本文化の特質について考えていきたい。

(学習目標)

- ・日本文化の多様性を理解する。
- ・日本文化が東アジア文化圏に属していることを認識する。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション。アンケートの実施。
- 第2回 日本とは何か
- 第3回 日本のかたち
- 第4回 日本の神話
- 第5回 日本の宗教（神道）
- 第6回 日本の宗教（仏教）
- 第7回 日本の哲学・思想
- 第8回 日本の祭り
- 第9回 日本の言語
- 第10回 日本の文学
- 第11回 日本の芸能
- 第12回 日本の建築
- 第13回 日本の食文化
- 第14回 日本の世界遺産
- 第15回 まとめ 到達度チェック

●準備学習の内容

事前に資料プリントを配布するので、あらかじめ目を通しておくこと。

●評価方法・基準

期末の到達度チェック（70点）、および平常点（30点。出席は含まない）で評価する。到達度チェックの結果については掲示板にて公表する。

●履修上の留意点

- ・予備知識などは問わない。古文・漢文資料の読解が主となるが、きちんと授業を聞いていれば問題ない。
- ・授業中の私語は厳禁。授業開始後30分以上経ってからの受講・出席は認めない。
- ・日本の文学、美術を専攻する人にとっても仏教の知識は不可欠である。積極的な授業への参加を期待する。

●教科書

特になし。毎回資料プリントを配布する。

●参考書

授業中に適宜紹介する。

科目名	日本文化概論Ⅱ（日本文化史Ⅱ）		
担当者	吉村 悠介		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日・日語 2部1年 日・日語 (1部1年 日・日語 2部2年 日・日語)	2年 英	2年 英

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

日本近現代の文化を、都市生活に焦点をあてて考察する。現在のわたしたちのライフスタイルの原型を築いた「大正文化」、商品と情報の消費が加速度的に進化した「戦後文化」を、それらが成立した背景とともに確認していく。

また、都市とその周縁の関係にも目を向け、帝都発展の陰に生み落とされた近代貧民窟での生活、高度経済成長期以降に顕著となる中央と地方の均質化、現代社会における郊外の位置づけについても検討する。

(学習目標)

- ・現代日本の生活文化がどのような基盤のうえに形成されたものであったかを理解する。
- ・日本の生活文化についての基礎的な知識を身につける。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 文明開化Ⅰ—防火と欧化
- 第3回 文明開化Ⅱ—帝都の暗黒、貧民窟
- 第4回 都市中間層
- 第5回 博覧会・百貨店・遊園地
- 第6回 大正文化Ⅰ—食と衛生
- 第7回 大正文化Ⅱ—衣と美容
- 第8回 大正文化Ⅲ—住と家族
- 第9回 一億総中流
- 第10回 戦後文化Ⅰ—団地の暮らし
- 第11回 戦後文化Ⅱ—間取り・家電・インテリア
- 第12回 戦後文化Ⅲ—現代社会における郊外
- 第13回 家と故郷
- 第14回 映像でみる戦後文化
- 第15回 まとめ（到達度チェック）

●準備学習の内容

事前に資料プリントを配布するので、あらかじめ目を通しておくこと。

●評価方法・基準

論述形式の試験で評価する。

授業の内容を踏まえたうえで、自分自身の考えが述べられているかを評価の基準とする。

●履修上の留意点

具体的な履修上のルールを確認するので、初回のガイダンスから出席すること。

授業に関連する書籍・論文等を紹介していくので、可能な限り読むこと。

●教科書

資料プリントを配布する。

●参考書

適宜紹介する。

科目名	日本文学史Ⅰ		
担当者	木谷 満		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日・日語 2部1年 日・日語 (1部1年 日・日語 2部1年 日・日語)	2年 英	2年 英

●授業のねらい

(授業のテーマ)

上代から近世までの、主要な作品を紹介しながら、日本文学の歴史について概観します。

(学習目標)

1 各作品の原文に触れつつ、それぞれの時代、ジャンルの特徴を読み取る。

2 作品相互の関係を理解する。

●授業計画

- 第1回 総論・上代①(地誌・風土記)
- 第2回 上代②(歌集・万葉集)
- 第3回 中古①(歌集・古今和歌集)
- 第4回 中古②(作り物語・竹取物語)
- 第5回 中古③(仮名日記・土佐日記)
- 第6回 中古④(作り物語・源氏物語)
- 第7回 中古⑤(歴史物語・大鏡)
- 第8回 中世①(歌論・古来風体抄)
- 第9回 中世②(歌集・新古今和歌集)
- 第10回 中世③(軍記物語・平家物語)
- 第11回 中世④(随筆・徒然草)
- 第12回 中世⑤(物語・御伽草子)
- 第13回 近世①(俳諧紀行・奥の細道)
- 第14回 近世②(読本・雨月物語)
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

授業内容に関する、調査・考察などを課します。課題内容については、その都度指示を出します。

●評価方法・基準

学期末の筆記試験(70%)と平常点(30%)によって評価します。平常点は、課題の成果、授業中の発表などを基に出します。提出課題は、点検の後、授業で返却します。

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

特になし(必要に応じてプリントを配ります)。

●参考書

小学館・新編日本古典文学全集。

科目名	日本文学史Ⅱ(日本文学史Ⅲ)		
担当者	田中 綾		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日・日語 2部1年 日・日語 (1部1年 日・日語 2部1年 日・日語)	2年 英	2年 英

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本の近代(明治以降)及び、現代の文学史概論である。

まず、私たちの"いま"と直結する、GHQによる被占領期の検閲と文学を俯瞰し、その後明治期に戻り、日清・日露戦争、昭和期の長い戦争における内務省検閲と文学作品の関係を読み深める。

(学習目標)

- ①文学作品が、言論統制のもとで活字化されていたことを理解する。
- ②文学作品を通して、「表現の自由」をみずからの問題として考え深める。
- ③近現代文学史と、"いま"の私たちの表現空間との接点を考察する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス—表現の自由とは
- 第2回 GHQ 検閲①その概要
- 第3回 GHQ 検閲②太宰治
- 第4回 GHQ 検閲③坂口安吾
- 第5回 近代文学と言論統制
- 第6回 〈肉食〉文学の登場
- 第7回 〈顔〉の描写の登場
- 第8回 女性作家と日清戦争
- 第9回 森鷗外と日露戦争
- 第10回 冤罪と作家たち
- 第11回 大正期モダニズム詩歌
- 第12回 禁じられた文学と推奨された文学
- 第13回 〈満洲国〉での文学
- 第14回 戦争の傷痕
- 第15回 現代の私たちの〈文学史〉(レポート提出日)

●準備学習の内容

GOALS で配信する教材を毎回参照すること。雑誌発表当時の原文(初出)を実際に目にもすることも可能であり、時代性を読み取ることもできる。

文学史はもちろん、日米の近現代史そのものに関心を持つ学生の、積極的な受講をのぞむ。

●評価方法・基準

- ・レポート(60%)と課題調査/感想カードの記述(20%)、受講態度(20%)で評価する。
- ・課題調査結果は集計次第、適宜フィードバックする。感想カードに書かれた創作(短歌・川柳)、数回ごとにまとめて講評し、フィードバックする。
- ・なお、私語は固く禁ずる。

●履修上の留意点

学期末に、4,000~5,000字程度の長文レポート(複数の先行研究を引用した、論理的なレポート)を課す。

授業内容に関心を持ち、期日厳守でレポートを提出できる学生の受講がのぞましい。

なお、長文レポートの代替課題として、GHQ 検閲における「英文調書の翻訳」という選択肢もあるので、英米文化学科の学生も積極的に受講してほしい。

●教科書

なし(毎回資料配布)。

●参考書

- 紅野謙介『検閲と文学』(河出書房新社、2009年)
- 山本武利『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』(岩波書店、2013年)
- 「國文學 7月臨時増刊号 発禁・近代文学誌」(學燈社、2002年)

ほか、授業内や GOALS 予習教材で、適宜指示する。

科目名	日本文学特論Ⅰ（日本文学史Ⅱ）		
担当者	木谷 満		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部1年 日・日語 2部1年 日・日語)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

『源氏物語』「桐壺」巻を中心に、光源氏の誕生から准太上天皇に至るまでの流れを追います。先行の物語や史書との比較を行いつつ、『源氏物語』の工夫を探ります。

(学習目標)

- 1 登場人物や背景の設定を理解する。
- 2 他の作品との比較を通して、源氏物語の特徴を考える。

●授業計画

- 第1回 源氏物語の概要
- 第2回 桐壺①(冒頭部)
- 第3回 桐壺②(桐壺更衣)
- 第4回 桐壺③(皇子誕生)
- 第5回 桐壺④(桐壺更衣・2)
- 第6回 桐壺⑤(皇子三歳)
- 第7回 桐壺⑥(皇子七歳・1)
- 第8回 桐壺⑦(皇子七歳・2)
- 第9回 桐壺⑧(高麗人の予言)
- 第10回 桐壺⑨(藤壺登場)
- 第11回 桐壺⑩(光源氏元服)
- 第12回 若紫(夢解き)
- 第13回 落標(宿曜)
- 第14回 藤裏葉(准太上天皇)
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

授業内容に関する、調査・考察などの課題を課します。課題内容については、その都度指示を出します。

●評価方法・基準

学期末の筆記試験(70%)と平常点(30%)によって評価します。平常点は、課題の成果、授業中の発表などをもとに出します。提出課題は、点検の後、授業で返却します。

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

特になし(必要に応じてプリントを配ります)。

●参考書

新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)、『源氏物語図典』(小学館)など。

科目名	日本文学特論Ⅱ（日本文学史Ⅳ）		
担当者	田中 綾		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部1年 日・日語 2部1年 日・日語)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本で1,200年以上もの伝統を有する「短歌」(五七五七七)という詩型。その現代での意義を踏まえ、秀歌を鑑賞し、実際に創作を試みる。相互合評を経て、合同歌集を製作し、生涯学習の一助とする。

(学習目標)

- ①文学史の観点から、近代短歌と現代短歌との差異を考察する。
- ②一篇の小説に拮抗するほどの、〈31音の小宇宙〉の表出技術を習得する。
- ③他者の作品を批評する技術を習得し、コミュニケーション力の向上を図る。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス——現代短歌とは(教科書についての指示も)
- 第2回 学生短歌会の動向
- 第3回 現代前衛短歌運動の意義
- 第4回 相聞歌の変遷
- 第5回 批評用語
- 第6回 歌会の作法・チーム編制
- 第7回 歌枕・名詞
- 第8回 オノマトペと〈音相〉
- 第9回 新しい歌語・ふりがな
- 第10回 労働/アルバイト
- 第11回 直喩①(～のような私)
- 第12回 直喩②(生の指針)
- 第13回 命令形・禁止形
- 第14回 合同歌集製作・校正
- 第15回 合同歌集謹呈の作法

●準備学習の内容

以下、各自で目を通しておくこと。

- ①北海道新聞「日曜文芸」欄コラム「書棚から歌を」<http://booklog.jp/users/kanoyauni>
- ②図書館雑誌コーナーにある「短歌研究」「短歌」
- ③GOALS 予習教材で提示する全国各地の学生短歌会の情報

●評価方法・基準

- ・作品創作・鑑賞力(40%)、コメント力(30%)、司会及びチーム内のとりまとめなど、授業貢献度(30%)
- ・提出作品について、佳作については毎回、授業内で講評を手渡す。

●履修上の留意点

- ・前半は講義主体だが、第6回のチーム編制以降は、チーム単位で合評や歌会を行う。
- ・授業時間内に短歌を創作・提出するが、その作品は「GOALS」から毎回、各チームの「印刷担当者」がダウンロードするため、時間に余裕を持って授業にのぞむこと。
- ・電子辞書等の持ち込み可。

●教科書

田中綾『書棚から歌を』深夜叢書社、2015年(ガイダンス時に、購入方法を指示する)。

●参考書

『菱川善夫著作集』全10巻(沖積舎、2005～12年)ほか、授業時に適宜指示。

科目名	ヨーロッパ文化概論 (欧米文化史Ⅰ)		
担当者	小柳 敦史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英 2部2年 日・英 (1部2年 英 2部2年 英)		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

私たちは日常的に洋服を着て、洋食を食べ、おそらくいい西洋的な建物で生活している。この「西洋的」な生活様式はどのように生まれたのだろうか。そして、こうした生活様式の「西洋性」とはなんなのだろうか。「西洋」という概念はとらえどころがないが、本講義では「西洋的」なものと密接な関連がある「ヨーロッパ的」なものについて考えていく。近代以降のヨーロッパでは、自分たちの生(活)のありかたに対する批判的な再検討と新たな生(活)の提案が繰り返されてきた。近代ヨーロッパ的な生(活)の成立と変化の過程をたどり、「ヨーロッパ的」とあるとはどのようなことなのか考察したい。それはまた、ヨーロッパのみならず、生のいとみなみとしての「文化」とは何かを問うことにもつながるだろう。

(学習目標)

1. 「ヨーロッパ的」な生活の成立とその変遷について適切な用語を用いて説明できる。
2. 「ヨーロッパ的」な生活から具体例をとり、文化とは何かについて論じることができる。

●授業計画

- 第1回 イントロダクション(1): ヨーロッパとは何か
- 第2回 イントロダクション(2): 文化とは何か
- 第3回 イントロダクション(3): 中世までのヨーロッパ文化
- 第4回 宗教改革による生活の変化
- 第5回 フランス革命と美食の誕生
- 第6回 イギリス産業革命と服飾の変化
- 第7回 生改革運動の諸相(1): 「衣」の改革
- 第8回 生改革運動の諸相(2): 「食」の改革
- 第9回 生改革運動の諸相(3): 「住」の改革
- 第10回 第一次世界大戦下の生活
- 第11回 生活のナチズム(1): ナチスのキッチン
- 第12回 生活のナチズム(2): 余暇の大衆化
- 第13回 生活のナチズム(3): 収容所の生
- 第14回 ヨーロッパ文化の現代
- 第15回 まとめ: ヨーロッパ文化とは何か

●準備学習の内容

上記の授業計画に書かれる用語・人名、および毎回の授業で示す「次回のキーワード」について事典等で調べてくる。さしあたりは Wikipedia でも構わないが、準備学習が深くなるにしたがって、講義の理解も深まり興味深いものになる。

●評価方法・基準

授業中あるいは宿題として課す小課題20%, 期末試験80%

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

使用しない。プリントを配布するのでA4サイズのファイルを用意すること。

●参考書

橋本周子『美食家の誕生 ―グリモと〈食〉のフランス革命』(名古屋大学出版会, 2014年)。  
川北稔『洒落者たちのイギリス史 ―騎士の国から紳士の国へ』(平凡社, 1986年)。  
竹中亨『帰依する世紀末 ―ドイツ近代の原理主義者群像』(ミネルヴァ書房, 2004年)。  
藤原辰史『ナチスのキッチン ―「食べること」の環境史』(水声社, 2012年)。  
他、授業中に適宜紹介する。

科目名	ヨーロッパ文化特論Ⅱ (宗教文化論Ⅱ)		
担当者	佐藤 貴史		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部2年 日・英・日語)		

●授業のねらい  
(授業のテーマ)

従来、ヨーロッパやアメリカは「キリスト教文化」の視点でのみ語られる傾向が強かったが、それは結局、「強者の論理」で世界を一面的に見てきたにすぎないのではないか。このような問題意識のもと、本講義では近現代のヨーロッパとアメリカをキリスト教だけでなく、ユダヤ教やイスラームの視点からも考察することで、ヨーロッパとアメリカにおける多面的な宗教文化を描いてみる。

(学習目標)

1. 英米文化に限らず人間社会の基礎となっている〈宗教〉が、どのような過程で生まれ、今日の宗教文化を形成しているかを学ぶ。
2. 現代世界における対立の火種のひとつにも数えられる〈宗教〉の基本的な知識を身につける。
3. 宗教を材料としながら、物事の因果関係や複雑な現象について明晰に説明できる力をつける。

●授業計画

- 第1回 宗教の現在
- 第2回 日本文化とキリスト教——ヨーロッパ・アメリカ文化を学ぶ前に
- 第3回 キリスト教の分裂——多元化するヨーロッパの始まり(近代のキリスト教文化1)
- 第4回 英国国教会の成立とピューリタン(近代のキリスト教文化2)
- 第5回 亡命するピューリタンたち(近代のキリスト教文化3)
- 第6回 アメリカ建国の〈物語〉と〈神話〉(近代のキリスト教文化4)
- 第7回 キリスト教と科学の対立?(近代のキリスト教文化5)
- 第8回 聖書イメージの現代化(近代のキリスト教文化6)
- 第9回 ユダヤ人はどのように描かれてきたか?(古代・中世のユダヤ文化1)
- 第10回 フランス革命とユダヤ人(近代のユダヤ文化2)
- 第11回 フランスの反ユダヤ主義(近代のユダヤ文化3)
- 第12回 ドイツのユダヤ人問題(近代のユダヤ文化4)
- 第13回 アイヒマン裁判の意味(近代のユダヤ文化5)
- 第14回 現代ヨーロッパのイスラーム
- 第15回 宗教の未来

●準備学習の内容

以下の内容を踏まえて、30分以上、予習復習をすることが望ましい。

1. 自分の生活の中に根づいている〈宗教的なもの〉を少しだけ意識して、そこから関心を広げること。
2. 参考書や新聞の中でふれられている宗教的なテーマにもできるだけ注意を向けること。

●評価方法・基準

複数回の小テスト(40%), 期末試験(60%)で評価する。

●履修上の留意点

世界史の知識も必要になるので、不安な人は高校レベルのものでよいので復習しておいてほしい。

●教科書

特になし。プリントを配布する。

●参考書

島蘭進 他=編『宗教学キーワード』(有斐閣, 2006年)。  
市川裕=著『ユダヤ教の歴史』(山川出版社, 2009年)。  
松本宣郎=編『キリスト教の歴史1』(山川出版社, 2009年)。  
高柳俊一 他=編『キリスト教の歴史2』(山川出版社, 2009年)。  
佐藤次高=編『イスラームの歴史1』(山川出版社, 2010年)。  
小杉泰=編『イスラームの歴史2』(山川出版社, 2010年)。





## 履修方法と履修上の注意

### 【履修方法】

- 1) 日本語教員養成課程の新規履修希望者は、毎年4月上旬に行なわれるガイダンスに必ず出席してください。ガイダンスの日時は、教務全般のものとは別に掲示されます。
- 2) 履修希望者は、Web履修登録の際に、履修登録画面の「課程申請」をクリックし、「日本語教員」にチェックをつけ、申請を行なってください。5月下旬に受講料の納付書を郵送しますので、これを支払うことにより登録完了となります。登録は、年度途中では認められません。また、年度毎の登録は必要ありません。
- 3) 上記登録は、2年次以上でも可能であるが、1年次に開始することが望ましい。

### 【履修上の注意】

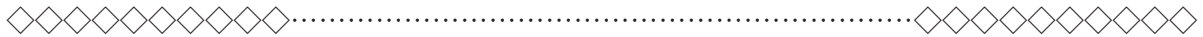
- 1) 別表の通り、人文学部の専門科目と一般教育科目／共通基礎科目の中から、課程の必修科目並びに選択必修科目が指定されています。このほかにも、関連科目を積極的に履修することを勧めます。
- 2) 別表に示される開講科目の年次は、日本文化学科のみならず他学科の履修希望者に対しても適用されます。また、科目によっては、他の科目の履修を前提としているものがありますから、注意してください。
- 3) 人文学部生は多くの課程科目が卒業に必要な科目と一致しています。他学部生の場合は、課程科目のいくつかを卒業に必要な科目とは別に履修することになります。
- 4) 科目等履修生として登録する場合、本学以外の履修希望者は4年制大学の卒業生であることが必要となります。編入学生の場合は、編入した年度の始めに登録を開始します。科目等履修生及び編入生ともに、他大学での既修得単位は認められません。
- 5) 課程修了証書は、本学日本語教員養成課程規程に基づき、卒業時または年度末に授与されます。
- 6) 履修登録や教務関係についての問い合わせは、人文学部事務室窓口で行なってください。日本語教員養成や資格等、全般的なことについては下記の日本語教員養成課程委員の先生方に相談してください。

人文学部	日本文化学科	教授	中川かず子	英米文化学科	教授	小松かおり
		教授	菅 泰雄		准教授	仲松 優子
		教授	徳永 良次			
		教授	大石 和久			
		教授	郡司 淳			

## 受講料について

本学の日本語教員養成課程を履修する場合、学則第 51 条の 2 に従い、受講料等を納入することになります。但し、**人文学部学生には受講料は免除されます。**

入学検定料（本学卒業者免除）		30,000 円
入 学 金（本学卒業者免除）		50,000 円
-----		
受 講 料	在 学 生（人文学部以外）	30,000 円
	卒 業 生	
	（本学及び他大学卒業）	9,000 円（1 単位）
-----		
修了証書手数料		5,000 円



## 受講希望者に望まれること

1987 年に制定された日本語教員検定制度では、日本語教員には「国際的感覚と幅広い教養，豊かな人間性，日本語教育に関する専門的知識・能力等の資質・能力」が要求されるとあります。その後、平成 12 年になって教員養成の教育内容に新たな視点が加わりました。それは、日本語教育を広い意味でのコミュニケーションと捉える考え方で、ガイドラインにあるように、「社会・文化・地域」，「教育」，「言語」の三領域をさらに 5 区分に分けた教育内容【①社会・文化・地域，②言語と社会，③言語と心理，④言語と教育，⑤言語】がコミュニケーションにつながるというものです。教授者と学習者が互いに学び、教え合うことが基本的なコミュニケーション活動であるとした上で、コミュニケーションを軸とする幅広い学問分野への関心を求めています。また、「言語と教育」の区分にある「実習」の重要性も指摘されています。平成 28 年 11 月法務省による国内の日本語教育機関に対する告示の中にも、「実習」が日本語教員の要件の一つであることが示されています。本学の課程においては、開講科目の中に実習を含む授業のほか、国内・海外で実習を経験できる機会もありますので、積極的に実践の場を得るよう努めてほしいと思います。

本課程で開講されない科目で、教員養成に必要とされる教育内容（一覧表参照）は自主的に学習することを勧めます。それ以外では、外国語の知識と能力を身につけることが必要です。英語はもちろんのこと、韓国、中国ほかのアジアの言語でもコミュニケーションができることは理想ですが、少なくとも基本的な知識と運用能力は必要です。また、コミュニケーションの基本をなす日本語学、言語学はこれからも是非、引き続き学習を続けてください。

日本語教員を目指す仲間同士で、自主ゼミ等を組織し主体的に学びあうことは有意義です。また、本学の留学生との交流も体験し、彼らに対する日本語学習支援も皆さんにとっては学びにもなります。関連教員もできる限り協力を惜しまないつもりです。

積極的に学習機会を求め、より一層の自己研鑽に努めていきましょう。

## ❖❖❖❖❖❖ 卒業生の声 ❖❖❖❖❖❖

### 大学で学んだことを基に、日本語教師としての挑戦

今江久美子（2009年英米文化学科卒業）

卒業してから早4年、オーストラリア、フィリピン、スウェーデンと日本語教師をしながら海外の地を転々とし、現在は再度フィリピンの地で日本語教師として活動しています。

そもそも日本語教師になろうと思ったきっかけは、日本について自分が何も知らないと再認識する機会があったからでした。そんな私が最初に「日本語」を意識したのは、高校でオーストラリアへ留学し、現地の友達に日本語を教えた時でした。次の日からたどたどしい日本語で挨拶をしてくれたことに感動したことを覚えています。その一方で、次々に彼らから聞かれる日本についての質問。そんな質問の答えに詰まることがしばしばありもどかしい気持ちになりました。

そのことがきっかけで、母国である日本についてもっと知りたいと思うようになり、日本語教師を目指し始め、この大学へ入学しました。大学では日本語教師養成課程、そして英語科の教職課程を履修するとともに、学外の日本語教室でボランティアをさせていただきました。日本語教師という職業は日本語の知識以外にも様々な分野の知識を必要とする職業ですので、大学で学んだこと一つ一つが今の私の土台になっています。

また教師という職業は、教える職業でありながら学ぶことが非常に多い職業でもあります。そして生徒が変わればクラスの雰囲気も変わり、雰囲気が変われば自然と教えるスタイルも変わってくるので毎回同じことを教えていながらも決して飽きることはありません。私も日々新鮮な気持ちで授業をしています。

とはいえまだまだ日本語教師としての道を歩み始めたばかりです。

今後はさらに日本語、そして日本の知識を深めると共に、より広い視野で自分自身について、それから日本語教育についても考え続け成長していきたいと思います。



（前列中央が筆者）

## 卒業生の声

### 海外の日本語教育の現場に立ってみて

小川ゆう紀（2015年文学研究科修士課程修了）

私は2013年3月に人文学部を卒業後、すぐに文学研究科修士課程に進学しました。学部では日本語教員養成課程を履修し、日本語教師を目指していました。大学院修了後、国際交流基金の「日本語パートナーズ」としてインドネシアに派遣され（2015年9月から2016年5月まで）、インドネシア国内の高校で日本語アシスタントとして活動しています。私にとって、日本語教師としての第一歩がインドネシアとなりました。日本語教師と言っても、私の立場はアシスタントであり、授業計画や教案を考えるのはカウンターパートの先生です。私の役割はあくまでも学習者のやる気を引き出すこと、とでも言いましょうか。

ご存知のように、インドネシアの日本語学習者は約87万人を数え、その約95%が高校で学習しています。派遣校の高校生や日本語専攻の大学生と関わっていると、やはりアニメや漫画の影響は深く浸透していると感じます。彼らはその分野においては確実に私より多くを知っていますし、例文や教材にキャラクターを使うとクラスが盛り上がります（彼らの反応は分かりやすいですよ）。例えば私のふるさとを紹介したとき、北海道は冬になると雪が……の「なると」に反応しクスクス笑い声が生まれます。彼らは聞き逃しません。

インドネシアの日本語教育現場に身を置いてみると、様々な課題が見えてきます。今はインターネットで日本の情報はもちろん、アニメや漫画も簡単に見ることができ、学習者の周りには様々なインプットがあります。それに伴い学習方法も次第に変わっていきます。高校に身を置く者として、彼らにとって日本語の授業が苦痛にならないように、日々カウンターパートの先生とともに創意工夫をしています。教えることは自らが学習することでもあります。私はアニメや漫画を観ませんが、それでいいのです。彼らに教えてもらうことでお互いに学習することになりますから。大学の「日本語教員養成課程」で学んだことに加え、実際の教育現場で学習者たちからも大いに学ばせてもらっています。

任期を終え日本に帰国する際には、アニメと漫画の知識がお土産になっているかもしれません。



（後列中央が筆者）

## 卒業生の声

### インドの大学で日本語教師の職に就いて

田澤あす美(2011年英米文化学科卒業)

北海学園大学の皆様、こんにちは。私は人文学部英米文化学科の平成23年度卒業生です。大学を卒業してすぐにオーストラリアへ行き、日本語教師として8か月民間学校に勤務していました。帰国後、しばらくは日本語教師とは関係ない仕事をしていたのですが、日本語を教える楽しさをどうしても忘れることが出来ず、JICAの青年海外協力隊へ応募し、現在インドの西ベンガル州にあるビシュバ・バラティ国立大学日本語学科で日本語教師として活動しています。私は高校生の時から日本語教師になりたかったので、進路を決める際迷わず「日本語教師養成課程」を学べる専門学校へ行って、最短距離で日本語教師になろうと思っていました。しかし、親も高校の先生も当時の私のやりたいことがころころ変わるのを知っていたので「もし違う職業になりたくなったらどうするの」とか「教師になりたいのなら大学を卒業するのが最低条件」という説得を受け、しぶしぶ大学進学を選びました。もちろん北海学園大学を選んだ主な理由は「日本語教師養成課程」があったからです。英米文化を選んだのも古典が苦手だという単純な理由からでした。

結果的に、親と先生の判断は正しかったです。幸運にも私のやりたいことは日本語教師から変わることはありませんでしたが、日本語教師は日本語文法さえ勉強していればいいというものではない、と教壇に立ってから毎日のように痛感しています。配属先の大学では大卒が採用条件でしたので、大学に行っていなければ応募することも出来ませんでした。思えば、大学で学んだことすべてが意味のあるものでした。歴史、宗教、コミュニケーションはもちろんのこと、一見日本語教育とは関係のないような科目までもが今の自分に必要なものでした。私は何にでも興味をもつ性格でしたので、共通科目も積極的に履修していましたが、過去の自分をほめてあげたい気持ちと共に、もっと履修できたのではと後悔すらしています。今では読書でその知識を補おうと必死です。そして配属先の先生の中には日本の古い文献が大好きな方がいて、日本人の私が外国人の先生に古典について教えてもらうという現象もたびたび起こります。大学受験の時に古典から逃げたしっぺ返しがこのように来るなんて思ってもみませんでした。

大学で何を学ぶかはすべてが自分次第だと思います。すべてを自分で選択して学べる環境の良さに在学中に気が付ける人は少ないはずですが、在学中の皆様には是非とも環境の充実さに気付いていただき、より実りのある学校生活を送っていただきたいと願っています。



熱心に日本語授業を受ける学生達

## 卒業生の声

### 日本語教員養成課程を修了 ― 国語教師として現場へ ―

金田一志帆（2015年日本文化学科卒業）

学ぶことの楽しみを知ったのは、大学2年の時でした。日本語教授法の講義で日本語ボランティア教室「たんぼぼ」の存在を知り、教員を目指す身として様々な経験を積みたいと考え、迷わず教室に参加させて頂きました。恥ずかしながら何の知識も身につけていないまま迎えた活動初日、外国人の方々の学ぶ姿勢と、ボランティアとは思えないほどの熱意を持った会員の方々の姿を見て「真剣に言葉と向き合っている人がこんなにも沢山いるのか」と衝撃を受けたことを今でもはっきりと覚えています。その頃から、普段何気なく使っている言葉の複雑さや、秘められた美しさに気付き、やっと自ら“勉強”を始めたように思います。それから2年以上教室の一員として、外国人に日本語を教えていました。

また、教職課程のインターンシップ制度を利用し、北海学園札幌高等学校で行われるチューター講習にも参加しました。教育実習は市内の中学校へ行き、生徒が言語活動をする時間を1秒でも多くするよう努めることを学びました。今は高校で国語を教える立場になりましたが、これらすべての経験があるからこそ、より良い授業を模索することも、楽しむことも、上手くできない自分に立ち向かうこともできているのではと感じます。

さて、突然ですが、皆さんの周りに小さな子供はいますか。彼ら幼児は自らの成長に合わせて少しずつ言葉を覚え、物事を理解していきます。言葉とは、自分の世界を広げてくれる大切な要素の一つです。言葉によってコミュニケーションも豊かになり、さらに視野が広がります。日本語を学びたい！とやって来る外国の方々も、総じてコミュニケーションに一生懸命な方ばかりです。国際化が進み、多種多様な言語が飛び交う昨今だからこそ、自国の文化や言葉を大切にしていくことが必要だと私は考えます。自分が普段使用している言葉を今一度見つめ直して、言葉の持つ力や、ひいては美しさまで誰かに伝えられるようになれば素敵だとは思いませんか。私は国語科教員、つまり「国の言葉」を教え伝える立場にいますが、国の言葉とはすなわち「日本語」です。大学で日本語についての専門的な知識を学んだことで、より深い内容の授業を展開することができ、現在も非常に役立っています。今の時代だからこそ浮き出る日本語の特徴や芸術性をも伝えていける、そんな教師でありたいのです。

沢山の出会いができるこの大学で、皆さんは、どんな教員を目指しますか。



(教壇に立つ筆者)

## ❖❖❖❖❖❖ 卒業生の声 ❖❖❖❖❖❖

### カナダ・レスブリッジでの日本語教育インターン

井上みのり（2017年文学研究科修士課程修了）

みなさんこんにちは。今、私はカナダのアルバータ州、レスブリッジ市にて、日本語教育のインターン活動をしています。「海外日本語教育インターン派遣」という国際交流基金のプログラムにより、本学の提携校の一つであるレスブリッジ大学が受け入れに協力しているものです。場所は大学、高校、中学、日本庭園と多岐に渡り、日本語クラスをしていれば、どんなところにも駆けつけてお手伝いをしています。今はアシスタントだけでなく、実際にプランを立てて自ら生徒に日本語を教える機会もあります。例えば中学校ではゲームや遊びをたくさん取り入れて楽しく勉強したり、日本庭園では大人の方を相手に実践的な会話練習をしたりと様々です。

カナダですので、授業中の説明には英語を使って日本語やその文法について述べることとなります。日々、先生方の言い回しや語彙を見聞きし、真似しながら、自分の言葉にしていきます。上手く説明が伝わったときにはとても嬉しいですし、生徒が真剣になって日本語を練習している様子は、いつも私にやる気を与えてくれます。

そんな私が日本語教育に興味を持ったきっかけは、大学で開講されている日本語教員養成課程を受講していたこと、そして大学三年生の時の国際色豊かなゼミのメンバーとの出会いでした。当時そのゼミにはアメリカ、中国、韓国からの留学生が参加しており、年齢が近いにも関わらず日本語がとても上手な人ばかりで最初はとても驚きました。そうして、仲が良くなった皆と意見を交わし、彼らの視点から見る日本やその文化、日本語を学ぶことの面白さ、難しさについて考えるようになるうちに、私自身が日本の外に出て、色んな人に日本語を教えてみたいと思うようになったのです。

そんな動機もあってか、養成課程での講義内容は私にとって面白いものばかりでした。また人文学部の専門科目と日本語教員養成課程の単位の多くが重複していて講義が比較的取りやすかったのもよく覚えています。大学で学んだことは、今のカナダでの活動に大きく繋がっています。座学だけではぴんと来なかったことが、実際に授業をして学習者に触れることで、大きな実感に繋がることも多々あります。日本語を外国語として捉え、学習者にとってよりよい教え方ができるよう、今のインターン活動を通じて、世界中のどこに行っても通用するような力を身につけたいと思っています。



（右側が筆者）



## 北海学園大学

### ■豊平校舎 (経済・経営・法・人文学部)

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 代表(011)841-1161

### ■山鼻校舎 (工学部)

〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号 代表(011)841-1161